
彼女は悪魔！

geinguns

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は悪魔！

【Nコード】

N8348D

【作者名】

geinguns

【あらすじ】

あらゆる手段を使って、男から金を巻き上げる女。しかし騙されても騙されても男は女を信じる。そして男を見守る女がひとり、そんなコメディです

1 野口とみずき

なぜか落ち着きがなく、体をもぞもぞさせている女。

なぜだろう。

不思議になって、思い切って俺は聞いてみた。
すると彼女は

「関係ないでしょ」

ものすごく睨みつけられた。

心配してあげたのに、、、、そりゃないでしょ。

あいかわらず彼女は落ち着きがない。
じっと汗もかいているようだ。

このビルの事務所は空調完備だし
まだ3月。外は暑いつてほどでもないのに

彼女は汗をかいている。

気になって仕事にならんじゃないか！

え？なぜそんなに俺は彼女のことを気になるんだって？

言わせんのか？好きにきまってるからじゃないか、、

かわいいし、やさしいし
いいとこだらけだもん、、時々俺に向かってニコツと笑ってくれるし

彼女も俺のことは好きかも知れないし、、たぶん。

デスクに座り、パソコンに向かう彼女は
何事もないように仕事をこなしている。

しかし、やっぱり落ち着きがない。

もう一度聞いてみる。やっぱり心配だし、、

「大丈夫？みずきさん。汗かいてるよ？」

俺の言葉を聞いたみずきさんは、静かにマウスから手を放し俺の方を見る。

「野口君、、、ちよつと外で話しできる？」

！！！！

おーとうとう来たか！みずきさんからの誘い！
俺の優しさにやっとな気が付いてくれたか！

給湯室で二人きりで話す、野口とみずき。

「ぶつちやけ言わしてもらつと、、あんたにはどう思われてもいいから言うんだけど

あたしがいつも油汗垂らしながら、、落ち着きがなく仕事してるのは、、

水虫なのよ！！しかも慢性のね！！それも足の裏全体に伝染してもうかゆくてしょうがないのよ！！

どんな薬つけても治らないしつこーーい水虫ムカつく！！

つて、、そんなこと言うためにここに来たんじゃないのよ！

あんた！仕事中あたしのことチラチラ見るのやめてくれる！！！！

正直キモい！

あたしはあんたに見られるのも嫌なぐらい嫌いなよ！！

そこらへんのことよく理解してくれる！」

俺は感動した。

彼女の秘密を俺に告白してくれたからだ。

感動しすぎて後半はよく聞いていなかったが、、

みずきは勢い良く給湯室のドアをボタンとあけて出ていく。

一人取り残される俺。

そうか、、そうだったのか、、
こんど彼女にプレゼントしよう。

水虫の薬と、五本指の靴下を。

部屋で水虫の薬をつけながら、五本指の靴下をはく彼女を
想像する、、

美しい、心洗われる風景だ、、

事務所に戻りまた落着きなく仕事をしているみずきを見る。
みずきもこちらを見る。なぜか怒った顔だ。

こうして心を通じ合わせた俺たちは
だんだんと深い関係になっていくのだろう。

1 野口とみずき（後書き）

かゆいの我慢できないよね

2 施しようがない2人

「みずきさん、、、みずきさん、、」

27回目の問いかけで彼女が振り向く。

「話しかけないでよ！知り合いだと思われるじゃない」

同じ会社の同僚なんだから、絶対知り合いだと思っただが、、

「病気の方はどう？」

「うるさいわね！昨日病院に行ったら

これはひどい！手の施しようがありません！

て言われちゃったわよ！」

「て、言うことは、、みずきさん、不治の病なんだね
かわいそう、、」

「あーあ！海にでも行きたいなあ！塩水は水虫に効くって話聞いたことあるし、、、、」

そう言い終わったみずきは目の奥に邪悪な光を宿し、にやりと笑った。

「そうだ！あんたこの前、趣味はネットで小説を書くことだって言ってたね？」

「そ、そうなんだよ！ファンタジー小説でね！竜の冒険ってタイトルだね

石像にされた父さんを助けに行くために、酒場で仲間をスカウトして、、、、」

「内容はどうでもいい、、、乗せてるサイトの名前とパスワード教えてくれる？」

「え！読んでくれるの！もちろん教えるよ！！」

パスワードを書いた紙をみずきに渡す野口。

そんなもの人に教えたらダメなのに、、

その夜、自分の部屋に帰った野口は早速パソコンの前に座る。

「よし！今日も名作をかくぞ！しかし毎日更新してもう200回目なのに
なんで訪問者数がゼロなんだろう、、」

そして今日もパクリに満ちた、文章を書きなぐる野口。
無事書き終え投稿する。

「まあ、、一応見ておこうか、、アクセス解析、
頼む！一人でいいから来ておくれ！！」

画面に映った数字を見た野口は驚きを隠せない様子。

「ええー今日のアクセス数23982628人！！！！
昨日はゼロだったのに！！なんでえ！！

、、、、、、、、

そうか！やつと来たか！！」

パソコンの前で仁王立ちになる野口。

「やつと俺の小説が世に認められたか！！遅いんだよなあ！！
これで印税生活に入ってみずきさんとも結婚して、、ぐふふ」

ふと見ると、メッセージが届いている。

「おお！さっそくファンレターか？うんうん！」

開いてみるとこんな文章が書いてある。

「すごいですね！！アクセス数23982628人！
きつと日本一ですよ！

あなたの小説に感服致しました！
つきましては私共で出版させていただきたいのですがよろしいで
しょうか、、、

でもうちは財政難でして、、

出版の費用200万円を貸していただけないでしょうか!!

大丈夫!!本が世に出れば200万位すぐ取り返せますよ!!

いますぐ200万円を振り込んでください!!今すぐに!!

M出版社」

あごに手を当ててうなづく野口。

「うむ!200万円ぐらい貸してやろう!貧乏出版社め!

まあ俺の小説が出版されればそんな金はすぐ回収できるかな!はははははは」

200万円を振り込む野口。

神よ、、彼を救い給え、、

そして野口は幸福な眠りについた。みずきの夢を見ながら、
ちなみに夢の中のみずきはいつもメイド服だ。

「みずきさん、ほんとにやさしくていい人、」

野口はつぶやく。

つぶやく野口の上には猫の額ほどの、都会の夜空が浮かんでいた。

2 施しようがない2人（後書き）

なんじゃこりゃ

3 全て幻！

「ちょっと？会員番号170番の美人1号だけど？なに？お前の買いは受け付けない？

金返せ？うるさいわね！臨時収入が200万ほどあったから返すわよ！

園田の3レース2番から総流し、馬単でね、10万ずつよ！
聞いてんの！！」

電話をするみずきさんの横顔を見つめている俺。
身もだえするほど美しい。

いったいどこへ電話をしているのだろうか？
専門用語を駆使してしゃべるみずきさんの姿は
キャリアウーマンそのものだ。

仕事も出来て、しかもやさしいみずきさんと
俺は釣り合うのだろうか。

以前の俺ならそう心配していた。

しかし今は違う！

俺は大作家への道を歩み始めたのだ！

貯金もなくなり今は一文なしだが
今に俺は印税生活に入る！

しかし、あれから一向に連絡がないのはなぜだろう、

それはともかく大作家になったらみずきさんにプロポーズしよう。

「俺はやつとみずきさんに釣り合う男になったよ！さあ結婚しよう
！」

すると彼女はほほをあからめ

「野口さん素敵！結婚しましょう！」
って言う。

くーーーー

妄想をしている俺の隣でなおも、みずきさんは電話をしている。

「え？仕事？ああ例の運び屋の、、
行方不明になってもいいやつ紹介してくれって言われても、、」

突然みずきさんは俺を潤んだ瞳で見つめる。
突然のことに俺はうろたえる。

なおも見つめる、みずきさんの瞳。
どこまでも澄んだみずきさんの瞳は、夜空に浮かぶ星のようだ。

「ああ、適当な奴見つけたから受ける！その仕事。
500万前払いの約束忘れるんじゃないわよ！！」

静かに電話を置くみずきさん。
するとなんと！俺の手を取ってこう言うではないか！！

「頼みたいことがあるの、私のこと好きだよね？」

好きに決まってるじゃないですかあああああ！！
あなたの頼みならどんなことでも聞きます！！

「私と一緒に旅行に行ってほしいの、、」

旅行!!!!!!

マジで、、

「行きます！あなたとならどこへでも行きます!!」

「うれしい、、好きになっちゃうかも、」

最近何でもうまくいってしまう自分が、怖い、、
大作家への第一歩を踏み出した次は、憧れのみずきさんと
旅行に行けるなんて!!

最高の幸せに浸ってる俺。
すると背後から突然、悪魔のような声が部屋に響き渡った。

「勇者よ、だまされてはいけません！これは全て幻です！」

3 全て幻！（後書き）

私もラゴスに殺意を覚えた一人です

4 悪魔よ去れ！

振り向くと、そこには秘書課の朋美が立っていた。

やけに長い手足。異様に大きな瞳。

おまけに胸には十字架が下がっている。

、、、気味の悪いやつだ。

俺はこいつを見るといつも思う。

「あなたはこの人間の皮をかぶった悪魔に
幻を見せられているのです、、アーメン

小説のアクセス数も彼女の下僕の下僕に
書き換えさせたもの、、まやかしいのです。

「今度の旅行もどうせ保険金殺人でも計画しているのでしょう。」

このクソ女、、でたらめばっか言いやがって！

「でたらめを言うな！この心の美しいみずきさんがそんなことできるわけないじゃないか！！」

それを聞いたみずきさんはっこり俺に笑いかける。

「あたりまえじゃない、、信じてくれるよね、、野口？」

「ええ！信じますとも！！！！
みずきさんがそんなことするわけない！！

可憐で清楚、そして純真なみずきさん、、
俺の太陽であるみずきさんを疑うなんて、天地がひっくりかえっても
ありえない！！！！」

「救いようがありませんね、、仕方がない
悪魔よ！この十字架を受けてみよ！！！！」

十字架を高々と頭の上にかざす朋美。

「悪魔よ去れ！」

するとなぜか突然みずきさんが苦しみ始めた。

「はははみずきさん、ノリがいいなあ！この馬鹿に付き合っことありませんよ！」

さすがみずきさん。ギャグの才能も天下一品だ。

「く、苦しい！何故だかわからないけど十字架を見るとほんとに苦しくなるのよね、、くそ！おぼえてろ……！」

みずきさんは逃げるように去って行った。

「大丈夫。悪魔は去りました。

あとはあなたの呪いを解いてあげましょう。

神よ！哀れな子羊を救い給え！！」

朋美はそう言うと、魔法のつえのようなものを取り出し
おもむろに俺の頭をガンガンと殴りはじめた。

「いて！何すんだよこの野郎！
お前こそ悪魔なんじゃないのか？」

俺は部屋を出て行きみずきさんを追いかけて行った。

1人残された朋美は、十字架を握りしめ
野口が去って行ったドアを見つめる。

「かならず、、かならずあなたを悪魔の手から
取り戻して見せます。

私の命に掛けても、、

4 悪魔よ去れ！（後書き）

夜中やってるヤマト、ゝゝ、目が離せません！

5 好きだから、、

「何？2週間の有給休暇だと？君はこの前とったばかりじゃないか？駄目だ駄目だ！今の時期忙しいんだから」

「わかりました、、でも課長、、夜の一人歩きは、、気をつけてくださいね、、ひひひひ」

みずきさんは今課長と打ち合わせ中だ。

2人とも真剣な顔をして何やら論議をしている。ビックプロジェクトでも立ち上げるのだろうか。

そして自分の席に戻ったみずきさんはまたまた俺の方を見て微笑む。

くーその笑顔を見るためだったら俺はどんなことでもします！！

「あなた、私の頼みを聞いてくれる？」

「はいはいはいー！！もちろんです！みずきさん！」

「そう、、あたりまえよね！それから私のことはちゃんとご主人さまって呼べって言ったでしょ！」

みずきさんはスタンガンを取り出し俺に押し当てる。

いてて！痛かったが、俺が間違った言葉つかいをしたんだから当然の報いだ。みずきさんが怒るのも仕方がない。

「今度あなたと旅行に行くじゃない？それであのくそ課長に有給休暇をくれて言ったなら断られちゃって、、

私は足の病気の療養に行きたかったただけなのに、、

ひどいと思わない？」

なに？あの野郎、、

俺のみずき様になんて失礼な！

「だからあ、、あなた代わりに課長に頼んでくれる？
おねがい」

「もちろんです！俺はあなたにすべてをささげて死ぬ覚悟はできています！

命に代えても有給休暇はとってきます！！！！」

意気込んで返事をする俺だが

また、あやしい声が今度はオフィスに響き渡る。

「だまされてはいけません！」

おいおい、、朋美かよ、、ほんとにこいつは気味が悪いやつだ。

「それにしても勇者様、、あなたはどうしてもここでこの悪魔に肩入れするのですか？

この悪魔はどう見てもあなたを利用することしか考えてませんよ！

どうしてなんですか？」

俺は煙草に火をつけ、遠い眼をして窓の外を見た、、

「みずきさんは、、かあさん、、俺の亡くなった母さんに面影が少し似ていてね、、

そういえばいつも怒られてばかりだったなあ
母さんとの思い出は俺の宝物だよ、、

はじめてみずきさんと出会って

俺にすごい得な話を勧めてくれて、、、、
北海道の土地を買って話なんだけど

俺は金がなくて断ったときにみずきさんに
こう言われたんだ。

あなたはいつも目の前のチャンスを見送る人生でいいの？
あなたには一歩前に踏み出す勇気がないのね！

俺はショックで動けなかったよ、、
確かに俺の人生、チャンスを見逃してばかりだった、、

そしてこんなに親身になって怒ってくれたのは

俺の人生の中でかあさんとみずきさんだけだった、」

「要するにこいつはマザコンで怒りたいドMなの!!」
みずきが言うと、オフィスにいる全員が深くうなづく。

「、、、、それって原野商法の勧誘だと思っんですけど、、、、

まあそれは置いて、、、、
出たな！邪悪な悪魔め！！またまた十字架でお仕置きです!!」

朋美が十字架をかざす。

「なぜ？く、苦しい!!くそーおぼえてろ!!」
みずきさんはまた具合が悪くなったみたいだ。

くそ！それにしてもあの十字架を抱えた変態女め！
みずきさんと俺の仲を邪魔しやがって！

「おい！朋美！もう付きまとうのはやめてくれ!!」

なんで君はことごとく俺とみずきさんの仲を邪魔するんだ！」

その言葉を聞いて、朋美は下を向いて顔を赤らめる。

「勇者様、、あなたをお守りしたかったから、、
す、、好きだから、、」

「ふーん」

俺はまた仕事に戻る。

それにしても、具合の悪くなったみずきさんが心配だ、、

5 好きだから、、（後書き）

感想お待ちします

6 空港でピンチ！

ここは空港。

たくさんの人がごった返している。

そこにたたずむ、野口とみずき。

「みずきさんそれにしてもよく休暇とれましたね！」

上機嫌でウキウキの野口。

そりゃそうだ。あこがれのみずきと2人っきりで旅行なんだから。

「娘の裸の写真をネットにばらまくって言ったらイチコロだったわ！
結局ばらまいたんだけど、」

「それにしても、、ひとつ聞いてもいいですか？
俺たちこれからいったいどこに行くんですか？
そろそろ教えてくれてもいいと思うんですけど？」

「別に知らなくてもいいじゃない！どうせすぐ死ぬんだし、おっと！思わず本音が、、」

え？なに？あなたは私と旅行に行きたいのよね？
だったら私がいれば別に行先はどうでもいいんじゃないの？」

俺が間違っていた、、確かにみずきさんの言う通りだ。
別にみずきさんがいれば行先なんてどうでもいい。
実につまらないことを気にしてしまった。

「じゃあ、私は飛行機に乗るから！ちなみにファーストクラスだけ
ど。」

あなたは迎えが来るからここで待ってるのよ！」

「え？一緒に乗るんじゃないんですか？」

あわてる野口の背後にあやしい男たちが迫ってくる。

2人は背後からいきなり腕をつかむと野口を外まで引きずっていく。

人気がないところまで来るとハンカチを口に押し当てられる野口。
気絶した野口を男たちは車のトランクに入れどこかへと走り去ってしまった。

そのころ空港では、、

「どいてどいてー！！！！！」

なんと空港のロビーを爆走するバイクが一台。

爆音を響かせ、オイルのにおいをロビー中にまき散らしながら、ぶっ飛ばしている。

そしてドリフトさせながら急停車するVTR250。

ドライバーの胸にはきらりと光る十字架が一つ。

ヘルメットを投げ捨て、あらん限りの声で叫ぶ！

「勇者様——！！！」

「くくく、もう遅いわよ、魔法使い。」

二階のテラスから不敵に笑うみずき。

「あんたの勇者様は、今頃もう始末されてるかもねえ、
さあ、私は金持ちになったし、地中海でバカンスでも楽しんでくる
わ！
ははははは」

みずきを追う朋美。

「逃がすか！」

階段を駆け上がるとおもいつきり飛び上りみずきへとダイブする。

「ウルトラ十字架アタッーーク!!」

「ぎゃあああああ」

顔に十字架を押し付けられたみずきは恐ろしい叫び声をあげながら
気絶してしまった。

押し当てられた十字架の跡がみずきの顔にくっきりと残っている。

その跡がすーっと消えると、みずきは静かに目をあけこう言った。

「私は、、私は今まで何をしていたのですか？」

6 空港でピンチ！（後書き）

先を考えてません！！

7 目を覚ましなさい！

「私、、もしかしたらまた悪いことをしてたのでしょうか？」

まったく表情の変わったみずきはうつたえながら朋美に聞く。

「ええ、、死刑になるぐらいの」

「ああ！恐ろしい！私時々自分がわからなくなるんです！
きつと悪魔に取りつかれているのだわ！」

さめざめと泣くみずき。

それをやさしくなだめながら、朋美は言う。

「大丈夫ですよ、、悪魔はもう去りました。
あなたはもう何も心配することはありません」

慈愛に満ちた笑顔をみずきに向ける。

「ありがとう！ありがとう、」

、、、、て スキあり！！」

いきなりみずきは持っていたカバンを朋美に投げつけダッシュした。

「あ！汚い！まてー」

それにしても、、

あなたを少しでも信じた私がバカでした！

あなたは仕方ないから見逃してあげる！

でも、、でも！勇者様の居所を教えなさい！！」

「しらない！今頃切り刻まれて海にでも浮かんでるんじゃないの？

じゃあねえ！」

みずきは笑いながら去って行った。

取り残された朋美から、

こぼれおちる涙が一粒、、

「あなたに、もしものことがあったら、、

私は生きてはいけません、、どうぞ

どうぞご無事で、、勇者様」

通り過ぎる人ごみの中で

ひざまずき、十字架を両手で握りしめる朋美。

朋美の必死の祈りは、天に届くのだろうか、、

そのころ、野口は、、

「あー！殺し屋さん！それローーン！

メンチンドラドラ！ 倍満ね！

それにしても弱いなあ殺し屋さんは！
こんな見え見えの手に振っちゃだめだよ！！」

なぜか上機嫌で雀荘にいたのだった、

7 目を覚ましなさい！（後書き）

どうしよう、これから

8 危ないのはみずき？

「お前が、アカギごっこしようって言い出すから
いけないんだぞお！」

「だってこいつこんなに強いとは思わなかったんで、、
お前だって吸血麻雀で一度人を殺したかったんだよなあ！って言う
てたくせに！」

困った顔をした二人。
さつき野口を連れ去った人たちのようだ。

「ふふふ、、ゲーセンで鍛えた俺の腕を
見くびったようだな、、それローン！！

メンタンピンドラドラ！

またハネちゃった！」

のどかに三人打で楽しんでる野口。
すると携帯が鳴る。

「もしもし、、、何だ朋美か、、、
え？今どこにいるかって？雀荘だけど？

殺し屋？ああ目の前にいるよ。

でも今は俺があいつらを殺しちゃってるけどね！

ははははは！」

ぶちつと携帯を切る野口。

「さあ！続きだ！」

すると突然ドアを蹴破るけたたましい音が雀荘に響き渡る。

入口に立つのは朋美。
ただならぬ殺気だ。

「大丈夫ですか！！勇者様！」

「大丈夫も何も、、何の用？こっちは用ないんだけど」

そして朋美は殺し屋に向かって叫ぶ。

「勇者様を返しなさい！さもないと容赦しないわよ！！」

身構えた殺し屋が、突然表情を崩す。
なにがおかしいのだろう？
なぜか殺し屋は笑い始めた。

「心配すんなよ！こいつはダミーだから！」

殺し屋たちはなおも下品に笑う。

「ダミー？どういうこと？」

「おとりだよ！につくきみずきを始末するためのな！」

まったくあいつは金は返さない、平気で人をだます
まったく非道なやつだよ！

ついにはうちの事務所に火をつけるって脅して来たから
始末することにしたのさ！

この男を始末している間、地中海で
ゆっくりアリバイでも作ってきてくれって言ったら
簡単に引かなかったよ！ははははは

あいつは地中海クルーズの船の中で
食いすぎで死ぬって設定になってるんだ！」

「、、、、まあ、勇者様を手に掛けようとした者には
当然の報いですね、、、、ちよつとかわいそうだけど、、、、

でも、よかった勇者様が無事で、
さあ帰りましょ、、、、ええ！！

勇者様？レインボーのオーラなんか出してどうしたんですかあー！！」

「貴様ら、、許さん!!みずきさんを手に掛けようとするやつはこつだ!!!」

ロooooooooooooン!!

大三元四暗刻!!48000オールだあ!!

お前らの負けだあ!!
さあ金払え!

地中海への旅行費用をな!」

「ぐぎゃあ!ま、負けた、、
でも、もう遅いぞ、、勇者よ、
今頃みずきは、、はははは!!!!」

金をふんだくった野口は
すぐさま空港へ行き

そのまま機上の人になった。

「ふう、、、疲れた、、、
みずきさん大丈夫だろうか

まあ簡単には死ぬような人じゃないと思うけど、、、

、、、って！！なんでお前が隣にいるんだよ！！」

飛行機に乗る野口の隣にはちゃっかり朋美が座っている。
なんだか野口と2人きりになれて楽しそうだ。

「わーい二人きりで旅行！楽しいなあ！
どこまでもお供しまーす！勇者様！

さあ冒険の旅の始まりだ！
なんちて、

ああー、はしゃいだらなんだか眠くなってきました、、
勇者様、、肩を貸していただいて眠ってもいいでしょうか、、」

野口は無表情。

「これが、、答えだ」

野口は肩に剣山を置いて自分はそのまま寝てしまった。

「いじわる」

野口の寝顔を眺めながら
朋美はつぶやいた。

8 危ないのはみずき？（後書き）

しかし小説の評価なんて、人によって違うだろ？
ましてや素人なんだし、、、

9 パーティー完成！

どこまでも青い空と美しい海。
ギリシャ。

ひよんなことから、ここにきてしまった、野口と朋美。

「ああ！いいところだねえ、ここは」
大きく深呼吸をしながら野口が言う。

「私たち、新婚旅行のカップルに見えるんじゃない
ですか？もしかして、、きゃっ！」

顔を赤らめる朋美。

「見えんでいい、、所で
適当に来てしまったのでこれからどうしたらいいんだろっ、、」

空港の前で途方に暮れる2人。

「ようこそギリシャへ！日本人ですか？
それにしてもあなたは美しい奥さんを連れてきますね！」

「うらやましい!!」

その声に2人が振り返ると

そこにはやたら体格のいいギリシヤ人らしき男が立っていた。

「おお日本なつかしいですね！」

私、武道を習いに大阪に10年住んでました。

それにしても日本の地名、難しいですね！

ニシナカジマミナミカタ？

ノエウチンダイ？

何かの呪文ですか？これは？」

「あやしいなあ？何の用ですか？」

朋美が尋ねる。

「おお！これは失礼しました。私はテオファニス。

ギリシヤ人のガイドです。ファニスって呼んでね！」

「ガイドかあ、、俺たち遊びに来たんじゃないんだなあ
みずきさんを助けにきたんだけど、、」

「みずき？おお！みずきですか！

最近日本人のすごい金持ちが来ましてねえ！
私たち争奪戦になったんですが、

確かその人の名前がみずきだったような、、、」

「ええ！みずきさんをしってるんですか！
ど、どこに行ったんですか！！みずきさんは」

「確か、そのまま船に乗って地中海を
回るって話は聞きましたが、、、」

「乗ります！！その船のりまつす！！
どこに行けばいいんですか！！！！」

空港前でワイワイ話している3人。

「はい！その船は、、、、、」

、、、、む、殺気!!」

鋭い眼光を放ったファロスはいきなり、後ろから襲いかかって来た男に

後ろ回し蹴りをローで叩き込む。

回し蹴りを食らった男は悶絶して転げまわる。

おそらく右ひざの半月板は衝撃で砕け散っているであろう。

「フグトルネードだわ、、やるわね」

朋美が感心してつぶやく。

構えるファロスにもう一人の男が猛然と襲い掛かる。

見事なさばきで応戦するファロス。
バチバチと手が当たる音が空港前、青い空の下に響き渡る。

続いて、ファロスのこうげき。

右のミドルキックを放つ。

ファロスは、キックが得意のようだ。

腕で脇腹を守る男。

しかし

ファロスの足はブロックされる瞬間、その場から忽然と消え次の瞬間には、男の頭を打ち抜いていた。

「目にもとまらぬ2段蹴り、、、この人空手の有段者だわ」

感心してうなづく朋美の隣で

ファロスは滝のように流れる汗をふく。

「そしてこいつは、かなりの汗っかきだ！

それにしてもここまで奴らの手が伸びてるとは、、、

ファロス！手を貸してくれ！お願いだ！」

バスタオルで拭いた汗を絞りながらファロスはうなづく。

「マフィアに狙われてるとは、、よほどの事情があるのでしょうかいいでしょう！力貸します！」

野口、そしてファロスを見た朋美は目をキラキラさせながらこう言う。

「テレレレツテレ　！！拳法家が仲間に加わった！！」

勇者様！これでやっとパーティーが組めましたね！！おめでとございますー！！

これで悪魔退治に出発できますー！！みずき！覚悟しろー！！」

「退治するんじゃないかって助けに行くんだよー！！それにパーティーってなんだよ！オタクをギリシャまで輸出すんなー！！」

勇者と魔法使い。そして拳法家が仲間に加わり
冒険の旅の支度は整ったようだ。

彼らのギリシャでの命をかけた戦いが今始まる！！

9 パーティー完成！（後書き）

才能ねえ、、、

10 恐怖のディナー

地中海を渡る豪華客船。

美しい海を渡る船の中は金持ちの詰め合わせ状態。
そこらじゅうで、セレブ臭が立ち込めている。

その中でもひととき目立つ女がひとり。

みずきだ。

今までとは違い優雅な立ち振る舞い。
まるで本物のセレブのお嬢様のような。

「セレブ！セーレーブ！私はセレーブ！
世界一のセレブなのよ！

ちなみに私は王家の出なのよ！ほほほ」

調子に乗って適当なことを言うみずき。

「うそばっか、、本当は東淀川の団地で生まれたくせに、、」
と、お付きの者（本当は殺し屋）がつぶやく。

「なに？なんか言っただ？」

それよりめし、、じゃなかった、、ディナーはまだかしら？
セレブの私にふさわしい豪華な奴を用意しなさい！」

「はい！ただいま！」

、、ふふふ。このディナーがお前の最後のディナー
になるんだよ！」

お付きの者がさっそくテーブルに料理を並べる。

「これはなに？」

「キャビアのバケツ盛りです。
たくさん食べてくださいね！」

「こ、こんなに食べられるわけじゃない！」

「え？セレブの方は皆さんこれぐらいは食べますよ？
もしかして本当はセレブじゃないんですか？」

セレブという言葉に弱いみずき。

「も、もちろん食べれるわよ！私はセ、レ、ブ！ですから！
金持ちだからキャビアもバケツでいっちゃうよ！」

にやりと笑うお付きの者。

「セレブ様の！ちょっとイイとこ見てみたい！
それ！一気！一気！」

はやし立てられたみずきはキャビアを一気食いする。
何とか食べ終えたみずきの顔色がかなり悪い。

「前菜パート１終わりです。」

次は、、、
」

「ちょっと聞いてもいいかな？
前菜なのこれは」

顔色を紫にしながらみずきが聞く。

「なんたつてセレブですから。
前菜はパート33までいっちゃいますよ！

それからメインは牛一頭丸焼を予定してます！
さすがセレブ！豪華ですねえ！」

「うう、、、聞いただけで死にそう、、、」

ふふふ、、、予定どおり苦しんでいるぜ！
お付きのものは満足そう。

「さあ！前菜パート2！
フォアグラのにぎわい丼です！

ちなみに20000キロカロリーあります！
セレブって感じだあ！！！」

椅子ごと後ろに、ぶっ倒れるみずき。
みずき暗殺計画はうまくいっているようだ。

そのころ野口たち一行は、

「ちょっと、何で朋美とファロスがセレブに化けて俺はボーイなんだよ！納得いかん！」

「あなたの身から出ている貧乏オーラでどんないい服を着ていてもセレブに見えないんですよ

いったいあなたは今までどんな暮らしをしてきたのですか？」

首を振りながらファロスが言う。

「うるさい！どうせうちのテーブルはミカン箱だよ！！
俺がだめなら朋美はどうなんだよ！

どんなにいい服を着ていてもあの変態にはにあわな、、、、！！」

地中海の潮風に吹かれ真っ白なドレスを着た
朋美は船のデッキを歩く。

ストレートの長い髪。
胸にはもちろん十字架。

海を見つめる朋美の横顔に
思わず見とれる野口。

「朋美さんはどこからどう見てもセレブですねえ！
この船一番の美人ですよ！

あんな人、ギリシャにもなかなかないませんよ！」

うつとりとした口調で言うファロス。

「ふん！」

野口はなぜかふてくされて横を向く。

「服なんかで俺は、、、騙されんぞ!!」

10 恐怖のディナー（後書き）

早く開幕しろ！！

11 こじれた関係

「うーん、」

いすからぶつ倒れて目を回すみずき。

殺し屋たちはなおもみずきに食べさせようとする。

「おい！もうひと押しだ！はやく持ってこい！

さあセレブ様！食べてください！

おなががパーンとはじけるまで食べてください！」

突然後ろのドアがバーンと開く。

そこにはなぜか決めポーズをとった3人が立つ。

「まてーい！悪人ども！みずきさんを放せ！」

「げ！くされ野口じゃん、、何でこんなところに居んの？」

せっかくはるばる助けにきた野口を
まるで汚物を見るような目つきで見るみずき。

「こいつらをかたづけなければいいんですか？任せてください！」
構えるファロス。

ところが、次の瞬間あるうことか
みずきがファロスに飛びつく。
そしてキスの嵐をファロスに注いでいるではないか！

「きゃー素敵な人！野口もたまには役に立つ！
筋肉すてきー！」

「なんですか、、この下品な女は
美しい朋美さんとは正反対のひとだ、、」

ファロスはかなり迷惑そう。

「げー！！俺と言う人がいながら！！
ひ、ひどーいー！！」

泣き崩れる野口。

「騙されているのがやっとわかっていただけたようですね！
勇者様！」

「さあ私の胸でお泣きなさい」

「うるせえ！変態！みずきさんはだましたりしない！」

「勇者様！」

「みずきさん！」

「オー朋美さん！」

「ああファロス！！」

4人がぐるぐる回りながら追いかけてっこをしている。
世にも醜い風景。

「なんか、馬鹿らしくなってきたな、、」

「だいたい、食いすぎに見せかけて殺すなんてめんどくさいことしないで、海にでも落とせばよかったんだよな」

「仕方ないだろ！本部からの命令なんだから」

「帰ろうか、、」

殺し屋たちは呆れてその場を去っていく。

もつれにもつれた人間関係。

はたして朋美の思いが届く日が来るのだろうか。
それは誰にもわからない。

1 1 こじれた関係（後書き）

雨
嫌
い

12 魔王登場

「くそーあいつらー裏切りやがってえー
覚えてろ！絶対放火してやる！事務所に放火してやる！」

みずきは怒り心頭の様子。

すると突然背後から声がする。

「なぜ君に裏切り者呼ばわりされなきゃならないのかね？」

4人が振り向くと、そこには小学校低学年ぐらいの
子供が立っていた。

「……どこの子供でしょう？
きみ？どこから来たの？」

朋美がやさしく問いかける。

しかし、その子を見てみずきは急に震えだした。

「みずき、、君にはいずれ死んでもらおう、、
覚悟したまえ、、はははは

、、わーい十字架のおねえちゃん！だっこしてえ
その胸の中でねむりたいのお」

みずきに死の宣告をした後
朋美には甘えるその子供。

「いいけど、、」

朋美はその子を抱っこする。
朋美の胸をまさぐる子供。
そしてファロスと野口の方を向いて、邪気のこもった笑いを
浮かべる。

その顔には、うらやましいか？この野郎！
と書いてあるようだ。

「ぬぬぬ！ゆるせん！、、そしてうらやましーい！」

ファロスは何とも言えないような顔をしている。

「みずきさん。あの子何者なんですか？」

野口が素朴な質問をぶつける。

「あの子は、、梅木、、友達からはうめちゃんって呼ばれているらしいわ

どこにでもいる小学一年生とは表向きの顔。
実は悪の帝王なの、、

算数の時間はちょっと眠たくなっちゃう
闇のフィクサーとは彼のことよ!!」

「みずきよ、それ以上私の話をするな、、
ちなみに跳び箱は3段跳べるようになったぞ。

おまえは私の組織を裏切り、金をだまし取ろうとした！
その行為は万死に値する!!

よって、夜の廊下はちよつと怖い闇のフィクサー
うめちゃんは君に死刑を宣告する。

ふはははははは」

「ひいひいひい、助けてください！
大みそかはわくわくして眠れない闇の帝王うめちゃん様！

何でもしますからあ！！」

みずきは泣き叫んでお願いをするが

うめちゃんはガリガリくんを食べながら
行ってしまった。

「もう、、、、こうなつたら！

ママの作ったオムライスおいしいね！が口癖の
裏社会の皇帝うめちゃんを逆にやつつけてやる！！

手伝ってくれるわね？野口」

「はい！何でもします！！

私の子分も手伝わせますので！！

子分ども！いいな！

これからあの闇の帝王をたおしにいくぞ！」

朋美とファロスは気乗りしない様子だったが
野口1人だけは勝手に盛り上がっている。

「この勇者が、魔王を倒して見せましょう！！」

12 魔王登場（後書き）

ふざけすぎ？

ご意見お待ちします

13 ちょっとまとめ

異国の町並み。

その中をあるく朋美。

いつもの日常とは全くかけ離れた風景が
野口の前に広がる。

そういえば朋美もいつもとは違うように見える。
野口にはそう見えた。明らかに。

「外国旅行のこの開放感を味わったら病みつきになるって
本当ですねえ。」

だって目の前に広がるのは
混じりっ気なし、純度100パーセントの

非日常ですから。

日ごろ自分が悩んでいることと
完全に切り離されるのは、ここにいる間だけですけれど。

野口さん、旅っていいですね！」

朋美が野口に微笑みかける。

そういえば。朋美が野口のことを勇者様と呼んでいない。

「ああ、そうだな」

「所で、、私があなたのことを勇者様と呼ぶのは何故だかわかりますか？」

「ゲームおたくだからだろ？」

「違います、、

あなたが、私を守ってくれる

世の中の苦しみすべてから救ってくれる

私だけの勇者になってほしいなって考えたからです、」

下を向いて赤い顔。

十字架を手でいじくり倒している。

「でも、あなたのみずきさんが好き。

私のことは見てもくれない。

野口さん。

私は自分でもちょっと変わってるって自覚はしています。

でも、私、魅力ないでしょうか!!

私今、勇気を振り絞って言ってるんですよ！本当に！

どうですか！野口さん！」

「、、、、、、考えとく」

街並みを眺めながら野口は気のない返事。

そしてちらつと朋美を見る。

隣には今、勇気を振り絞った

若い女性が赤い顔をしながら歩いている。

地中海を見下ろすこの街並みを歩く彼女。
白い服に漆黒の長い髪。

まるで彼女はこの美しい風景の一部のようだ。

そして、

彼女がいなければ、本当にこの街並みは
美しいと感ぜられるのだろうか。

彼女がいるからこそ

この街並みは美しいと感じたんじゃないのか？

そう野口は思った。

「じゃあ、、先きますね！」

走り出す彼女。

「ちょっと待って！」

振り向く朋美。

やけに印象的な色白の顔。

野口はうつむき加減、少し口をとがらす。

「もう少し、、もう少し一緒に歩かないか？」

「、、、、うん」

そして2人は再び歩き出した。
非日常の風景の中を。

2人はいつの間にか手をつないでいた。

13 ちょっととまじめ（後書き）

あれ
れ

14 うめちゃんとみずき

日本に帰ってきたら桜が咲いていた。

春になってた。

帰る飛行機の中で悪の帝王がずっとみずきの隣で

「殺す！絶対殺す！裏切り者は絶対殺す！」
と言い続けていたためだろうか。

みずきの顔色が土色だ。

朋美は朋美で何を勘違いしたのか
俺からぴったりとくっついて離れない。

旅先で俺は血迷っていたのだろう。

日本に帰って見てみると、朋美はやっぱり変態のままだった。

「私、、家に帰る、、疲れた、、」

生気のない声でみずきが言う。

悪の帝王うめちゃんの手を引いてとぼとぼと
タクシー乗り場へと歩いて行く。

「みずきよ、帰ったらこの悪の帝王に
ハンバーグを作るのだ。」

付け合わせのにんじんは要らんぞ。
悪の帝王はにんじんは食べられないのだ。

ふははははははは
「

「わかったわよ、、それよりも
宿題ちゃんとやりなさいよ！

うめちゃん！じゃなかった悪の帝王様！」

???

なんだこの違和感は、、

なんだかまるで、、

「ふははは！」

この私は人間界を支配するために
このバカ女の体内より生まれ出たのだ！」

「馬鹿とは何よ！後でお尻ぺんぺん決定！」

、、え？

もしかしてうめちゃんって

「私の子供。私シングルマザーなの。」

ええ??

「み、みずきさんの子供、、

みずきさんって、、処女じゃなかったんだああ！！！」

「こんな、汚れた処女がいるわけじゃないじゃないですか、、

勇者様の眼はやっぱり節穴ですね、、」

朋美は呆れた顔で野口に言う。

「そういわれれば似てますねえ
悪な所もそっくりです。」

みずきさん！

あなたも人の親なら、子供の手本にならなければいけません。

これに懲りて悪いことはもうやめて、、」

「うるさいやい！

悪は止められないのよ！

えーい！空港の壁にガムつけちゃえ！」

「つけちゃえ！」

そう言うと、みずきとつめちゃんは
ガムを壁になすりつけて走って逃げに行った。

、
、
、

大丈夫だろうか。

俺は一人悩んでいた。

俺はうめちゃんに好かれるだろうか。

それに、俺はうめちゃんをちゃんと育てることができるだろうか、
、

みずきさんとおれとの中にまた新たな障害が立ちはだかる。

うーん！大変だ！

そう考えながら俺はくつついて離れない朋美と

腕を組みながら空港を後にしたのだった。

14 うめちゃんとみずき（後書き）

ギブアップはせんぞ！
書き続ける！

15 邪魔ばっか、

今日もみずきは野口を潤んだ瞳で見つめ
またお願いモード。

今日はランドセルをしょったうめちゃんまでいる。

「赤ちゃんだったうめちゃんを抱えて
あの頃私は途方に暮れていた。

仕事もせず、すぐ暴力をふるうあの馬鹿とは
こっちから縁を切ってやった、

泣きじゃくる、まだおむつもとれないうめちゃんを
見て私は思った。

この子は私が一人で育てる。

たとえどんなことをしても。

それから私は必死に働いた。
でも世間の風はシングルマザーには冷たいものだった。

子育てに理解のない会社や
世間の冷たい目、、

それに屈した私が悪の道へと
転がり落ちていったのは仕方のないことだった、、

野口さん、、
あなたをだましたのは悪気があつてのことじゃない、、
必死だったの、、うめちゃんを育てるのに、、

分かってくれるわよね。」

みずきは野口に懇願するまなざし。

「そんな話誰が信じるものですか！だいたいそんな困っている人が
なんで地中海で豪遊してるんですか！

ねえ野口さん？、、、、

、、、、ええ！！

なんで野口さん号泣してるんですか！！」

朋美が驚いている隣で野口は号泣していた。

両目からあふれる涙。

あふれ出る泉のように野口の眼から
大粒の涙は絶えることなくこぼれおちていた。

「く、苦勞したんですね、みずきさん

これ、、持つて行ってください！

みずきさんに勧められた北海道の土地を買おうと
思って貯めていた100万です!!

これであなたの痛みが癒されるのなら、
僕はうれしいです」

「え? いいの? やった」

うめちゃん! 今日のご飯は焼き肉よ!!」

「みずきよ、ほめてとらずぞ」

ふはははは

金がなくなったらまたこいつにもらいに行こう!!」

金をふんだくってみずきとうめちゃんは
走り去って行った。

「勇者様? いいんですか?

まただまし取られちゃったんですよ!！」

あわてる朋美を野口はやさしく制す。

「僕は、騙されてなんかいないよ。
だって、最初の言葉。あれはみずきさんの本心だ。

これは間違いない。僕にはわかる。

それに、

俺一文なしだし、

あの金、上の一枚だけ本物で
あとは新聞紙なんだ、

ははっは!

2人は笑いだした。

「あと、」

「あと、何ですか？勇者様」

「この前の話、」

俺がお前だけの勇者になるって話、

考えてやってもいいぞ、」

「ええ！ほんとに！」

朋美は野口に飛びついてキスをする。

野口はこの時初めて朋美の体に手をまわした。

と、その時2人に迫る巨大な黒い影。

「ちよつとまっただあ！」

はるか頭上から落ちて来る、切れ味鋭いかかと。

「かかと落とししか！
そんなもの俺には通用せん！

俺のひみつ道具、ヘルメット君で防いでくれるわ！！」

もちろん被るのが間に合わず
野口の頭に突き刺さる巨大なかかと。

「朋美！会いたかったです！
あなたに会いに日本までやってきました！！

すーきーでーすー！！」

のびている野口を踏みつけて朋美に迫る男。
もちろんファロスだった。

朋美に迫るファロス。

ところがファロスにも邪悪な影が迫りくる！

「パパよ！あなたの未来のパパよ！

すーきー！！ファロス！」

「パパー！」

みずきが戻ってきて

まためちゃくちなことになる。

朋美は口を尖らせちよつと不満な顔。
ふてくされながらぶつぶつ何か言っている。

「もう、、何で邪魔ばつか入るの！
いいところだったのに！」

前途は明るくない朋美の恋。
よかつたら応援してやってください。

15 邪魔ばっか、（後書き）

変な感じ。

2 - 1 ときどきの同居人！

竜の冒険 第二百一回

久しぶりにパソコンの前に座り
俺は文章を書く。

「やあ、ぼくはラゴス！
こんな卑怯なところに隠れて物語を
1 か月も止めた張本人さ！

でも僕には悪気は、、あべし！」

ラゴスは一瞬で異空間へと消されてしまった。
世紀の大悪人は当然の報いを受けた。

ふう、、また名文を書いてしまった。

充足感に包まれた俺は煙草に火をつける。

「なんですかこれは？」

突然背後に巨大な影

「これはもしかして小説のつもりですか？」

私がサイトの管理人なら即削除して
サイトを荒らした罪で告訴しますねえ、、

ちなみにアクセス数は、、ひゃーはっはっはは！
トータルでひ、、1人！！

201回も投稿して1人つて、、
逆に難しいですよ！

いつたいこのバカが読んだんでしょねえ！！」

「、、、、つてうるさい！

なんでお前が俺の部屋にいるんだよ！ファロス！！」

俺の後ろにはなぜかカップラーメンをすすって
座るファロスがいる。

「適当に日本に来たんで住むところがないんですよ！！
ここにいてもいいでしょ？

ほら！一人暮らしの部屋に突然同居人が来るのは
ラブコメの基本ですから！」

「あほか！一人暮らしの男の家に突然現れる同居人は、絶対美少女
に決まってるんだよ！
マッチョな外人が来たら気色悪いわい！！」

「その筋の人向けのラブコメってことで、、
許してください」

、、、1人暮らしの俺の部屋に突然現れた
同居人に俺の生活はかき回されそうだ。

もし、風呂ではち合わせたり
その同居人に淡い恋心を抱いたり
同居人の結婚式に乗り込んで「ちよつと待ったあ！」とか言う展開
になったらどうしよう、、、

俺の隣には胸毛をくしで手入れしているファロスが相変わらず座っ
ている。

俺は頭をかかえてしまった。

2 - 1 ときどきの同居人！（後書き）

ギャグのセンスをください、、

2 - 2 エロ？

「ねえ、、勇者様？」

朋美は野口をじっと見つめて尋ねる。

「なぜ魔法やドラゴンは現実では存在しないのでしょうか
魔法が使えたり、ドラゴンを倒す冒険の旅
に行けたらどんなに楽しいだろうって思いませんか？」

野口は食べていたテリヤキチキンを横に置く。

「朋美、それは夢だからいいんだよ。
できないこと、あり得ないことを心に思い描くから
楽しいんであつて

本当にできてしまったら、とたんにそれはつまらない
ものになるんだ。

考えてみろよ。

昔の人からしたら俺たちは、魔法のような世界に住んでるんだぜ？

でもそれは俺たちにしたらくごく当たり前のことでしかない。

そんなもんさ」

その言葉を聞くとにつこりとした朋美は胸に下がった十字架を握りしめて目を閉じる。

「魔法は使えないし、ドラゴンにも会えないけど勇者様はここにいるわ、、、

私の勇者様、、、あなたの胸の中で眠らせてください」

汚く狭い野口の部屋で、
お互いの距離は狭まって行く。

互いの顔を見つめる2人。

野口の右手が朋美のすらっとした腰に巻きついていくと
静かに唇を、、、、、、、

「俺のパソコンで何してんだ朋美？」

「な、なんにもしてませんよ！」

野口に右手をひねられた朋美は必死でパソコンの画面を隠す。

「ん？そして野口は静かにファスナーを下ろし
ブラのホックを、、？？？？？」

勝手に俺をネタにエロ小説書くな！！！！

しかも俺のパソコンで！！！！

野口はあろうつことか女の子にグーで殴りかかる。

ところが画面のある項目を見て凍りつく野口。

「、、、、え、、、、

私の勇者様 作ともみ

らぶエッチ部門1位

アクセス数1000000!!」

床にぶつ倒れる野口。

両目から大粒の涙がこぼれおちる。

「な、なんで朋美の書いた小説が1000000アクセスで俺のが1なんだ!わー!ーん!」

「それは朋美さんの小説が野口の100万倍面白ってことだよ」

ファロスがとどめの言葉を野口に突き刺す。

「確かに、、、勇者様の小説は、1行読むのにも苦労しますからねえ、、、

おっと、、そんなことないですよ!」

その言葉を聞くと野口は部屋の隅に行き足を抱えて座り、プチプチをやり始めた。

モノクロの世界が野口の周りにだけ広がっていく。

何事かをつぶやく野口。

「みんな、、わかってない、、わかってない、、」

2 - 2 エロ？（後書き）

なにしてんだろう俺

2 - 3 道場へ行く

「駅前のビルの2階ですから。

1階にコスプレの店があるからすぐわかると思います。

3階はセクキャバなので、間違った振りして行かないでくださいよ
！」

野口と朋美はそんな怪しげな雑居ビルを探して
街を歩いている。

2人はファロスの通う道場に招待を受けたのだ。

2人はコスプレの店があるビルを見つけたが
そのビルには空手道場の看板がかかってない。

仕方がないので、その店の店員に聞いてみる。

「すみません店員さん。このビルの二階は
空手道場でしょうか？」

「、、、、、、」

店員はその言葉に全くの無反応。

「ちょっと？聞こえてるでしょ！
二階は道場ですよね！」

「、、、、、、」

何故だかわからないが
頭に赤い髪飾りをつけたその店員は
野口の言葉に全くの無反応だ。

イライラする野口を朋美は制してこつ言つ。

「ここは私に任せてください、、、
アスカさんですよね？」

「はい！なんですか！」

勢いよく返事をする店員。

「アスカ、、、のつもりか？
ファンが見たら殺されるぞ、、、」

店員は野口をジロリと見つめてこつ言つ、、、

「あんたバカア？」

「ため――――！！！！！」

馬鹿はお前だ！！！！！！

絞め殺してくれる!!!」

アス力風の店員に朋美は道場が二階にあることを教えてもらい、怒り倒している野口をひっぱって二階までいく。

「こんにちわー、あのう、ファロスさんいますか？」

朋美は遠慮がちにドアをあけこういった。

道場の中は様々なウェイトトレーニングの機械が並び音楽が大音量でかかる中、ごつい男たちが汗を流している。

道場と言つより、ボクシングジムのような雰囲気の中
朋美の言葉に、中にいたごっつい男たち全員が反応する。

「おおーファロス！すごい美人がお前を訪ねて来たぞ！
おい！どういう関係だ！」

わらわらと集まってくるごっつい男たち。

朋美の周りに集まりワイワイと騒いでいる。
野口は弾き飛ばされ、1人蚊帳の外。

「君たち！私の将来のワイフなんだから
手荒に扱わないでくれよ！」

滝のように流れる汗を拭きながらファロスが現れた。
隆起した筋肉からは、熱気と湯気が上がっている。

「ようこそ！朋美さん！、、とその他一名、、
ここが私の道場です！ゆっくり見学して言ってくださいね！

そして、、私の強くてかつこいいところを見て

このおバカさんより私の方がいいと、早く気がついてくださいーい」

朋美は下を向いてかぶりを振る。

「ごめんなさい、、ファロスさん。
私にとっての勇者様は一人だけなの。

野口さん」

朋美は野口に抱きつこうとするが
まるで闘牛士のようにひらりとかわす野口。

「やめろ！下のアスカもどきなんかと
心が通じる変態は嫌なんだよ！

お前なんかこうしてやるわ！」

あろうことが、野口は倒れた朋美にキックをガシガシと入れる。

「へへへ！思い知ったか！、、、、、?????」

野口は突然男たちに両腕をがしつとつかまれる。押しピンで止められた虫のようにまったく動けない野口。

野口は道場中の人間から殺気を受けていた。

何十人もマツチヨな大男からにらまれた野口は身ぶるいをする。

バターン！ガチャ！

道場のドアが閉められカギがかけられた、、、、

「きさま、、、、あろうことがこの美女からの愛情を受けずなおかつ暴力をふるうとは、、、、」

殺す！絶対殺す！」

取り囲まれた野口は半泣き状態。

この後野口がどうなったかは
言うまでもないだろう、

2 - 3 道場へ行く(後書き)

ばかばかしくてごめんなさい、、、

2 - 4 狭いんだよ!!

「勇者さま！今日はいいもの持ってきたんですよ！」

部屋でファロスとくつろいでいると
いきなりドアが開いて、朋美が入って来た。

「ウィーですよウィー！
面白いですよー！」

朋美は大きな箱を野口の前に差し出す。

「ウィー？なんだそれ？
スタン ハンセンか？」

「そんな私が生まれたところに全盛期を
迎えたレスラーなんか知りませんよお

そんなボケしても誰も付いてきてないですよ！

そんな、、

ブレーキが壊れたダンプカーって言われてて
現PWF会長のハンセンなんて、、」

「朋美、、むちゃくちゃ詳しいじゃないか、、」

とにかく、朋美は持ってきたゲームをテレビにつないで
電源を入れる。

「最初はこのソフトで練習してください！」

朋美が差し出したソフトには「初めてのウィー」

と書いてある。

「早速やってみよう！ファロス！勝負だ！」

「いいですよ！このリモコンを振り回すんですかなるほど、、、、ふん！！」

野口はファロスが振り回したリモコンに吹っ飛ばされて壁に激突した。

「気をつけてください！ファロスさん！ウィーのリモコンでたくさんの方がけがをして社会問題にもなったんですから」

「そ、それより救急車を、、、誰か、頭のリモコンを抜いてくれ、、、」

気を取り直してゲームを始めようとする
とまた勢いよくボタンとあくドア。

「ウィーウィウィーいいなあ!!
やらせてよ!野口!

ていうかくれ!そのゲーム!」

「くれ!」

ドアの向こうにはみずきとつめちゃんが立っている。

ズカズカと部屋に入ってくると
野口の横に座りまた懇願する目つきで野口を見る。

「あれ以来、悪の組織が壊滅しちゃって、

手下は逃げちゃうし、借金も払えずで、
とうとうアパートも追い出されちゃった、

うめちゃんと手を取り

あてもなくさまよう私たちが

唯一頼れるのはあなただけだった、

お願い、、、

私とうめちゃんをここに置いてくれない？」

野口立ち上がって飛び上る。

狂喜乱舞する野口。

「きたー！！やっと来た！！

ラブコメ的展開！！

もっちらんいいにきまつてるじゃないですかあ！！
一生いてもいいですよ！！！！

と、言うわけで、朋美とファロスはいまから3秒以内に出て行ってくれ！！

あ！ウィーは置いてけよ！
うめちゃんが遊ぶんだから」

朋美がすくつと立ち上がる。

そして、あらん限りの憎悪を
みずきに向ける。

「私の勇者様と一緒に暮らすなんて
私がゆるしません！」

悪魔よ、、久々に出てきたな！

またまたまた！十字架でお仕置きです！！」

ところが、みずきとつめちゃんは
なんともないようだ。

「ばーか！目をつむれば十字架なんて怖くないよ
だ！

ばーかばーか！」

「なんてこと、、十字架が効かないなんて、、

仕方ありません、、

私もここへ泊って、この悪魔どもが
悪いことをしないよう見張っていきましょう

、、、、きゃ！勇者様一緒に寝ましょうね！」

「私も行くとこないのだからここにいます！」

ワイワイ騒ぐみんな。

しかし野口は何か言いたそう。

「あのなあ！4人と子供1人で
このワンルームで暮らせるわけないだろ！」

狭いんだよ!!」

「5人だけではないぞ!馬鹿野郎よ!」

そついうとつめちゃんはなんと犬を取り出す。

「ミニチュアダックスのデモンだ!」

「きゃあかわいい!だっこさせて!」

朋美が犬を見て喜ぶ。

「よいぞ!朋美よ、、、

しかし貴様はまるで犬を3匹抱いているみたいだな、、、ぐふふふ」

野口のワンルームで5人と一匹が暮らすことになってしまった。

これで野口に平穏な暮らしは
一切なくなってしまったようだ。

2 - 4 狭いんだよ!! (後書き)

風邪かな？

2 - 5 最多記録!!

今日も天使と悪魔は戦いを繰り広げている。

俺の部屋で。

その横ではファロスがトレーニングをし
うめちゃんがりモコンを振り回している。

俺の部屋でえ!!!!!!!!!!

「聞いてください野口!

1人暮らしの冴えない男の家に突然現れる
同居人の人数がラブコメ史上最多を記録したらしいですよ!

今度ギネスに申請しときますね！」

「同居人が5人も現れたらもはやラブコメじゃねえ!!」

ファロスが言うたわごとをツツコミながら俺は一つの思いが頭の中を駆け回っていた。

この状況は異常だ、、、、という思いが。

「でも、、、、野口、、、、

あなたとはしばらくお別れしなければなりません、、、、

実はUFCに行つて二ようと思ひまして、、、、
「

ファロスは深刻な顔をして言う。

「ええ！あのオクタゴンで繰り広げられる
究極格闘技に参戦するのか！

よし！行つて殺されてこい！」

「え？日本の銀行はそんなに危険なんですか？
こわいですねえ」

「、、、、、、、、つてそれUＦＪ！！」

極度につまらないボケをかわしつつ俺は対策を練る。
とにかくこの状況を何とか打開しなければいけない。

ワンルームに5人と一匹。
プライベートなんてあったもんじゃない。

そうだ！みんなにこの状況がいかに異常かを説明すれば分かってもらえるかもしれない！

みんな大人なんだから話せばわかるはずだ。

「みんな！聞いてくれ！」

俺は大声を張り上げると一斉に振り向くみんな。

「みんな！この状況は異常だとは思わないか？

狭い部屋に5人がひしめきあい暮らしているんだ！

これだけでも異常なのに

しかも男と女どうしが一つ屋根の下にいる！

これはまずいんじゃないのか！

ここはお互い大人なんだし

ここから出て行って、自分の暮らしをするのが筋というもんじゃないか！」

皆俺の言葉に黙ってうなずいている。

まあ俺のスピーチ力を持てればたやすいことだが、

「さあ！みんな出て行って自分の力で生きていくんだ！」

俺の言葉につなずいたみんなはみんないつせいに返事をする。

「いや！」

「だって楽しいんだもん！」

みんなはそう言つと、また戦いを繰り広げ
リモコンを振り回す、、

俺の部屋で、、俺の部屋でえええ！！

俺はたぶん呪われている。

悪魔よ、

俺の過酷な運命をプロデュースする悪魔よ。

こんな回りくどい苦しめ方をするぐらいなら
いつそひと思いにやってくれ、、

俺はこの部屋で繰り広げられている
悲劇的光景を見ながらそう思った。

2 - 5 最多記録!! (後書き)

雨、
、
、

2 - 6 貴重な朝の時間

朝7時にうめちゃんを起こし
顔を洗わせ簡単な朝食を作る。

そしてうめちゃんときちんと食事を取り
自分の支度に入る。

「あの悪魔もうめちゃんの世話だけは
ちゃんとやるようですね、、、ホッとしました。

もしうめちゃんが悲しい目にあってたら
私、本気で嫌いになるところでした、、、」

朋美は微笑みながらみずきとうめちゃんの様子を見守る。

みずきは食器を洗いながら、誰に言うのでもなく呟いている。

「うめちゃんが体調が悪くないか、いつも楽しく学校に行ってるか
そして、ママのことが好きなのか、」

昼間働いている私が確かめられるのは
この朝の一時間しかないのよ。

だから、朝はうめちゃんの顔をしっかりと見て
食事と一緒に、出来るだけ話しかけてあげる。

そして、うめちゃんのことを好きだよと
精一杯伝える。

朝はいつもこんな感じかな、」

時間は8時。登校時間になる。

「では、行ってくるぞ！」

野口よ！デーモンのことは頼んだぞ！！」

「ああ、仕方無い、、、面倒見てやるよ」

野口が笑ってうなづく。

ミニチュアダックスのデーモンもワンと吠えてうめちゃんを送り出す。

「よし私も行ってくるわよ！」

今日もがんばってネズミ講の会員を勧誘するぞ！」

気合いを入れてみずきママも出勤していく。

「、、、、また犯罪ですよそれ、、、、」

朋美はあきれ顔。

みずきがドアを出ようとすると
するりと彼女に迫る黒い影が一つ。

派手なスーツを着て
ニヤニヤ笑うその顔は

爬虫類を思わせるような顔つき。

その男はドアを出て歩きだすみずきの背後から
声を浴びせかける。

「よお、、、久し振り、、、
探したぜ、、、まさかこんな所でホームドラマごっこやってるとは
なあ

みずきよお」

その言葉にふり返るみずきは、一瞬驚きの表情を見せたが
すぐその男をにらみ返し、言葉を返す。

「梅木、、、今さら何の用なの？」

くくく、、その男は笑いだし、
みずきに言葉を発する。

「くくく、、変わってないなあ、強い！
強い女ってところは変わってないようだなあ」

朝のさわやかな光の中、その梅木と呼ばれた男の笑い声が響き続け
る。

みずきはその男を見つめたままずっと黙ったままだった。

2 - 6 貴重な朝の時間（後書き）

子どもの虐待は無くならないものでしょうか、、、、、

2・7 笑われにきた!!

「今さら何の用なのよ!」

みずきの叫びが野口のマンションにこだまする。

その憎悪のこもった悲痛な叫び声は
平和な朝を切り裂き

混沌とさせるのに、十分な迫力があつた。

不安に駆られ、野口は玄関へと走る。

「どうしたんですか? みずきさん」

玄関へと出てきた野口を見る梅木のいやらしい眼。

「ほほう、こいつが新しい相手かい？

へえ、おまえが選ぶ男にしてはまじめそうじゃないか

おい！おまえ！こんな奴と付き合つてると

取って食われちまうぞ！」

へへへ！

またも梅木は笑う。

「おーどうしたんですかみずきさん！」

ファロスも続いて玄関へと現れる。

またまた梅木のいやらしい眼が炸裂する。

「おいおい、みずきやるねえ、

2人も相手してるのかい？しかもマツチヨな外人とは、

さすがみずき、、、俺の愛した女だけのことだけのことはある」

「みずきさん！大丈夫ですか？」

朋美も玄関に現れた。

「すげえな、、、みずき、、、
3人とは恐れ入ったぜ！

しかも女を相手にするとは、、、
両刀とは知らなかったぜ」

わんわん！

デーモンまで玄関にくる。

「おーう！！

犬とまで付き合うとは！

おまえのアレはブラックホールか？

お前の無尽蔵のスタミナに乾杯！」

、、、、、、

「この人一体何を言ってるんですか？」

朋美は不安に駆られてみずきに聞く。

「こいつは梅木。お察しの通り
私の前の旦那なの、、」

そしてこいつは、、」

みずきは顔を覆って叫ぶ！

「馬鹿なの！しかも底なしの！」

よくよく見ればズボンは後ろ前に履いてるし
ネクタイの代わりに昆布を首に巻いているありさまだ。

「すげえ、すげえぜみずき！」

梅木はそっぴいながら、
どこかで拾って来たのだろう。
桜の花びらをまき散らしながら
踊り狂っている。

「でも安心して、、、こいつを追い払うのは
すごく簡単、、、」

梅木！

「たす1は！」

関ヶ原の戦いは何年に起こった？」

うげ、、、

奇妙な叫び声をあげ、梅木の動きは止まった。

目を白黒させ、舌を出して苦しんでいる。

「たす1は、、、

みずきよお、、、

俺に難しい問題を出すんじゃないやねえって

前から言ってるじゃないか、、、

えーん！

わからないよお！

もうおうちへ帰る！」

梅木は泣きながら逃げて行った。

取り残された4人と
とてもない疲労感が漂っている。

「なんなんだ？ いったい、、、
何がしたかったんだ、、、あいつ」

野口は魂が抜かれたような声でつぶやく。

「、、、、笑われに来たんじゃないですか？」

朋美がそう言うと、一同納得の表情。

皆は朝の支度の続きをするために
また部屋に戻っていった。

2・7 笑われにきた!! (後書き)

2000本はきつと明日達成するでしょう

2 - 8 桜

桜咲くこの春。

花吹雪舞い散る下、十字架を握りしめ
そっと目を閉じる乙女。

乙女は願う。愛しい人が振り向いてくれることを、
、

「呼んだあ？ ああああ」

乙女の足元では愛しい人が真っ赤になって酒に吞まれている。
上半身裸で背中に「あほ」と書かれたその愛しい人は

自分のパンツの中にビールを注ぎながら
朋美に襲い掛かってくる。

「いやあ！今の勇者様は嫌いです！」

今日はみんなでお花見だ。

みずき一家とファロス。

そして野口と朋美は公園ではた迷惑な宴会を繰り広げていた。

「朋美さんを襲うとは！！ゆるさーん！！！！」

酒を飲んで手加減を忘れたファロスのキックが
野口のテンプルに入る。

糸の切れたマリオネットのように崩れおちる野口。

気絶した野口に容赦なくまた落書きをするつめちゃん。
もう宴会は警察の取り締まりを受けてしまいそうな勢いで盛り上がっている。

酒の飲めない朋美は一人おいてけぼり、、

朋美は一人離れて公園を歩きはじめた。

公園では至る所で宴会が繰り広げられている。
その上で咲き誇る桜に朋美は話しかける、、

桜さんはこんなにきれいに咲いてくれているのに
みんなは騒いでみようともしない、、

せめて私だけでも見ていてあげる、、

池のほとりにあるベンチに座り朋美は一人桜を眺める。

すると

きれいな桜に見とれている朋美の背後から
聞きなれた声がした。

「うっ、あいてる？」

野口は朋美の隣に座ると桜と一緒に眺めはじめた。

「俺は気が付いていたよ。桜が咲き乱れていることに。そして君が、美しいことにもとくに気が付いていた。」

君への気持ちが素直になれた俺は今、朋美とキスがしたい」

「今日は駄目、、今日はあなた危険だから、、」

「なぜだい？なぜ俺が危険だとわかるんだい？」

「だって、、」

背中にきけん！！あほ注意！！って書いてあるからです！！！！

ちゃんと酔いを醒まして服を着てくださいー！！！！
酔っぱらいは嫌いですー！！」

咲き誇る桜を見上げながら朋美は思う。

もう、、飲みすぎです勇者様、、

でも、さっきの言葉
うれしかった、、

2 - 8 桜（後書き）

ね！達成したでしょ！！

2 - 9 リターンマッチ

5人で食卓を囲む夕食。

目の前ですき焼きを囲む5人。

貧乏な5人には珍しく豪華な食事だ。

「そおつれでねえ！！リーチが来た瞬間に
魚群が来てねえ！

暴走したかと思ったら

ポラリスが回ってチュンサンとキスをしたのよねえ！！」

、、、、

とにかく、みずきがパチンコで勝ってきたようだ。
みずきが奮発して肉を買ってきたので

今日はすき焼きパーティーとなった。

そんな平和で幸福な夕食の最中

ドアを乱暴にガンガンたたく音。

野口がドアを開けるとそこには
明らかに招かれざる客が一人。

「へへへ、、、みずきよお
豪勢なもん食ってるじゃねえかあ、、

俺にも一口食わせろよお、、」

玄関から入ると勝手にテーブルに着く。

明らかに嫌悪感を表すみずき
もちろん叫ぶ！

「なんであんなかごはん食べなきゃならないのよ！！
知能指数が10を超えてからいらっしやい！！」

ところであんた！1たす1は！
さあ！わからなかったら出て行きなさい！！」

へへへ

余裕の笑みを浮かべる梅木。
梅木はひとしきり皆を眺めながら

ゆっくり話し出す。

「へへへ、、この前の俺とは
わけが違っただよ！

俺にはつよい味方がいるんだよお！

旦那！助っ人の旦那！
サクっといってやってください」

「ふふふ、、、答えは、、、2だ!!」

ななとうめちゃんがママを裏切って
梅木の答えを言う。

ふははは！　　へへへへ！

2人の高笑いが部屋に響き渡る。

「ところで梅木、、、誕生日にウィーのソフトの約束
忘れるでないぞ！」

「もちろんですよ、旦那！へへへへ」

愛する者に裏切られ、傷ついたみずき。
怒りにまかせて吠える！吠えまくる!!

「この外道！うめちゃんをだまして
裏切らせるとは!!殺す！絶対殺す!!」

怒り狂うみずきをよそに
梅木は涼しい顔。

そしてうめちゃんに何やら袋を差し出す。

「旦那！注文の食材、買ってきましたぜ！
それ！鍋に投入！」

なんと梅木はすき焼きの鍋の中に
じゃがいもをたくさん投入し始める。

皆は啞然、呆然。

「へへへ！さつきまで、豪華！すき焼きパーティーだったのが
一瞬にして、食卓に肉じゃが一品しかない貧相な家庭になってやんの！

不思議だねえ！

じゃがいもって！」

「わしは、すき焼きより肉じゃがの方が好きなのだ。
子供の気持ちをわからんママを持つと苦労するわい！」

ふははは！　へへへへ

またもや、2人の高笑いが響き渡る。

ショックを受けたみずきは
真白に燃え尽き、床に崩れるように倒れた、、、

「何しにきたんだ？今度は、、、」

野口が呆けたようにつぶやく。

「たぶん、リターンマッチでしょう」

ファロスが言うと、皆が納得してうなづく。

そして、真白になって燃え尽きたみずきを
ほっというて、

さっきまですき焼きだったものを
食べはじめた。

2・9 リターンマッチ（後書き）

うめちゃんと暮らす家がほしい！！

2 - 1 0 きれいな涙

「行くぞ！それ！」

うめちゃんのけるサッカーボールを
みずきが追いかける。

みずきは

日ごろの運動不足がたたり、まったく追いつけない。

春の公園。

ボールをける2人は幸せそうだ。

「ゼーゼー、、、おえ、げぼ、、、
無理！絶対無理！」

うめちゃん、私リタイア！」

公園の地面に倒れるみずき。

「しかたないなあ、みずきさん！
俺が相手しますよ！」

おい！うめちゃん！
未来のパパがあいてしてあげるよお！」

「誰がパパなんですか、
みずき家の捨て駒にされてるくせに、」

公園に野口と朋美も現れた。
みずきを見かねてうめちゃんの相手をする野口。

「いくぞーうめちゃん！」

2人が楽しそうにボールをけるのを見て
みずきはポツリとつぶやく。

「やっぱり男の子の遊びにはついていけないわ、
あの子にはやっぱりパパが必要なのかなあ、」

楽しそうにボールをけるうめちゃん。

「おまえ！筋がいいぞ！さすがわしの手下だけのことはある。」

だがな、、梅木の方がもっとうまいんだぞ！

奴は高校の時インターハイに出るほどの
サッカー選手だったんだぞ！

ヘディングのしすぎで馬鹿になったらしいのだが、、」

「なら、あいつにサッカー教えてもらおうよ！うめちゃん！」

「そうだな、みずきは下手だしなあ、あーあ、梅木といっぱい遊びたいのお、」

「そうだ！あいつの子になってしまおうか！」

そう言ったあと、ちらつとママを見るうめちゃん。

しかし、みずきは後ろを向いたまま。

「どうしたのだ？みずき、」

うめちゃんがみずきの顔を覗き込む。

するとそこには、

大好きなママが涙を流しながら立ちつくす姿があった。

「、、、、なつちゃえばいいじゃん、、、、」

流れる涙を拭こうともせず
下唇をかみしめる。

こらえてもこらえても、あとから涙は溢れ出す。

うめちゃんは、固まったまま動かない。

うめちゃんの方にそっと手を置き、やさしく微笑む朋美。

「泣かしちゃったね、、うめちゃん。

さあ、こんな時はどうすればいいんでしょうね？

よく考えてみて？」

朋美の言葉にうなずくうめちゃん。

みずきに近寄り、涙を拭いてあげる。

「嘘に決まっているだろうが、、
悪かったな、、」

突然うめちゃんをぎゅっと抱きしめるみずき。

うめちゃんもママを抱きしめる。

「、、、、どこへも行かないで、、、、」

「あのみずきさんが泣くなんて、、、以外だな」
野口は少しびっくりした様子。

「ママってみんなあなんですよ、、、」

うめちゃんしかいないみずきさんにとっては
なおさらでしょう、、、

でも、、、きれいな涙でした。

私もあんな涙だったら流してみたいです。」

みずきは涙を流したのがうそのように
今はつめちゃんと楽しそうに遊んでいた。

2 - 1 1 打ち破られる平和

「野口はいいですねえ、」

ファロスが野口に言う。

「何が？」

「私、まじめすぎてつまらないってよく言われるんです。
ギャグが寒いんだそうで、」

野口はいいですねえ、

なんたって、そこにいるだけで面白いんですから、

天然って言うんですかねえ、日本語で、」

「うるさい！好きで笑われてんじゃねえ！」

たわいのない会話が交わされる野口の家は
平和そのもの。

昼下がりのけだるい光に眠気を誘われる午後。

みずきと朋美も少し眠たそう。

部屋で4人がだらだらと過ごしていると、

じりりーん！

突然携帯の着信音が鳴る。

「だれだ？着信音、黒電話にしてる奴は！」

そういう野口を、悪い？とばかり
睨みつけ、電話に出るみずき。

電話の声に、顔をしかめるみずき。
歓迎してない相手からの電話のようだ。

「へへへ、、、みずきよお！梅木だけど？

あ！おまえも前は梅木だったっけ！
ひひひひ！！

あ！そうそう！

うめちゃんが、俺んここで暮らすっいて

るんだけど？

おめえのことが嫌いなんだってよ！

へへへへへ！

しかたねえから、俺うめちゃんと暮らすんでよろしく！
じゃあねえええ！」

「ま、まって！！」

青ざめた顔で叫ぶみずき。

「ほんとにうめちゃんがそう言ってるの！！！！」

「おお！言ってるぞ！

悪いことばかりするママには愛想がつきたそうだ！

もう顔も見たくないって、、いて！よせよ！

おい！携帯返せ！」

「ママ！！」

電話の声に震えるみずき。

「梅木に騙されて！誘拐されたんだ！」

助けてくれ！

今、前に3人で住んでいた家に閉じ込められている！！

助けてくれ!!、、、、

、、、、、、

へへへへ、、うめちゃんが余計なことを
言ったようだ、、

くれぐれも助けようなんて思うんじゃないぞお!!

へへへ、、じゃあなあああ!!」

切れてしまった携帯を握りしめるみずき。

「どうしたんですか？」

野口の答えにも返答なし。

そして、自分のカバンをぐそぐそと探り
何やら黒いものを取り出す。

「ちょっと、用事できたんで出かけてくる！
夕飯には戻るね」

「分かりました。まっていますね、、、って！！！！

みずきさん！！マシンガンなんか抱えて
どうしたんですか！！本物？じゃないですよね？」

「ううん、本物。

ちよっと梅木ぶち殺してくる！」

風のように走り出すみずき。

「勇者様！久々にただ事じゃありませんよ！
後を追っかけて止めなきゃ！！」

朋美は後を追って走り出す。

「俺たちも行こう！3人そろって出動だ！」

激高したみずきを追いかけて走る3人。

みずきの鬼の形相を見て
ただ事ではないなと、悟る野口だった。

2 - 1 2 3 人の家

何の変哲もない路地を入ると
立ち並ぶのは同じような家の群れ。

その中の一つの家の前でみずきは止まる。

俗に言う建売住宅丸出しのその家を
みずきは疎ましそうに見上げる。

「この家、いい思い出ない、」

新婚当時は希望に満ちて引っ越しをしてきた。

ここに一生住むんだろうなあ

そう思った。

ところがそうはいかなかった自分は今
前夫と子供の奪い合いをしている。

なさけないため息をひとつ。

そして大きく息を吸い叫ぶ！

「うめちゃー！ーん！ー！」
愛する者を呼ぶ叫びは町内中に響き渡った。

その声を聞きつけたのか、梅木が2階のベランダから顔を出す。

「くけけけ！きやがったか！悪魔！
ここをよく覚えていたな！

うめちゃんを返してほしかったら
そのドアから中に入ってこい！

ほれ！、、はいれ！」

みずきはドアを見つめる。

ゝゝゝ 罨ゝゝ か？

「みずきさーん！」

ほどなくして、3人も現れた。

みずきは現れた野口を見つめる。

「野口ゝゝゝ」

相変わらずの媚びるような目つき。

その怪しい目つきは

野口の眠っていたMっ気を再び呼び覚ましたようだ。

「みずきさん！いや女王様！
あなたのお役に立ちたいです！

何なりとお申し付けください！！」

野口の昇天しそうな顔。
かなり嬉しそうだ。

「そう、、、ありがとう、、、

じゃあ、、、

ドアに突入しろ！！！」

野口をドアにけり飛ばし、畏のないことを確認したみずきは、続いてドアから突入する。

「助けに来たわよ！どこ！、、、、？？？」

ドアの中に入ったみずきは必死でうめちゃんを捜すがそのうちあることに気がつく。

周りを見渡し驚きの顔を見せる。

その信じられない光景に、みずきはただ立ちつくし
同じ言葉を繰り返すばかりだった。

「なんで、なんで？」

2・13 ホームドラマはめんどくさいので終わりにしよう

その部屋でみずきは見た。

引っ越しかたはずけたはずの荷物が
元通りになっているこの部屋を。

家具や本棚、お気に入りだったカーテンまで
元通りになっている。

「みずき、」

梅木だ。

すかさずマシンガンを構えるみずき。

「部屋は元どおりにしておいた。

うめちゃんも一緒に暮らしたいって言っている。

そして、みずきをこの部屋に呼んだ、

誘拐でもされたとでも言わなければ
おまえは来ないと思って、ごめん」

黙って梅木を見つめるみずき。

「へへへ、ホームドラマは
もうめんどくさいんでやめにしようや！

うめちゃんが望むなら、
いいじゃねえか」

みずきから消える敵意と殺気。
梅木も少しずつみずきに寄ってくる。

しかしその瞬間みずきはマシンガンを構え
トリガーに手をかけた。

何とも言いようなない微笑みを浮かべる、、

「やっぱ、、この家嫌いだわ、、

ぶっ壊す!!!!!!」

安全装置をはずし腰に構えたマシンガンから
放たれる銃弾は

あっという間に、部屋を粉々にしていく。

冷蔵庫、食器棚、壁
すべて穴だらけだ。

もうもうと煙が立ち込め
廃墟となった家にみずきは立ちつくす。

「古い思い出なんかいらない。

だからぶっ壊す。

こんな安っぽい家の小さな思い出なんか
私がいま粉々に壊した。

うめちゃんと私には
これからの方がよっぽど大事なの。

昔の良かったころの思い出にすがって
家を復元して戻ってこいなんて、、

そんなんだからおまえは駄目なんだよ!!

梅木！おまえも家と一緒にぶっ壊そうか!!

逃げようとする梅木を捕まえ馬乗りになり銃口を向ける。
みずきは叫ぶ！叫び倒す！

「これからあなたは変わるの？変わらないの？

どっちなの？返答次第では、、」

「変わる！変わるよ！仕事もまじめにするし
うめちゃんも大事にするよ、、」

「まったく、、あんだ、、

あんだ、うめちゃんのパパじゃなかったら
とつくに殺してるわよ、、

うめちゃんに感謝しなさい！」

煙草に火をつけほえむみずき。

マシンガンを放り投げると
平手を梅木に一発。

そして梅木にキスをするみずきだった。

、
、
、
、
、

「これからあ、い、いいと言いますね。
みずきさん」

帰り道朋美が野口に言う。

「そうだな、」

「私たちのこれからはどうなるんでしょうねえ、楽しみ！」

野口を見つめる朋美。

その視線を感じながら照れ隠しに下を向いて歩く
野口だった。

3 - 1 復活！（前書き）

悪な主婦みずきを書きたくなったので
また書きました。

3 - 1 復活！

「はあ、、、温泉でも行きたいなあ」

みずきはそう言ってため息をつく。
「なんだかお疲れのようだ。」

「最近バタバタして遊びにも行っていないや、、、
金もないし、、、ヒマもない、、、」

「貧乏ヒマなしとはよく言っただもんだわ」

ひっさしぶりに出社した会社のデスクで
ひっさしぶりに出社した割には仕事もせずボーっとしているみずき。

「仕事もやる気ないなあ、、、なんだか何にもやる気が出ないし
体もだるい。そう言えば胸の谷間もごっつかゆくていらつく！」

うー！いらいらするうー！あー水虫もかゆくなってきたあー！

うへえ!!

髪の毛にネックレスが絡んだあ!!と、、とれん!!
わあ!目の中に虫入ったあ!!目がごろごろするう!

お、落ち着くんだ!そうだこんな時はタバコでも吸って気を落ち着かせ、、

ぎゃあ!ライターで指に火つけちゃった!!

ぐげえ!!

なんでこんなにいらいらすることが続くんだあ!!!!

くー!!こんな時は、、野口!野口!こっちこい!

「はい!みずき様!お呼びです、、ぐは!!」

みずきは飛んできた野口をいきなり右フックでなぎ倒す。
悶絶する野口。しかし野口は気持ち良さそうに快感の笑みを浮かべている。

「ぶん殴って少しすっきりした、、

しかしこの心のもやもやはまだ晴れない、、なぜなぜなの？」

「月一のアレですか？、、ぐはあ！！」

余計なことを言ってさらに殴られる野口。
しかし、しつこいようだが野口は気持ちよさそう。

「ああ！わかった！なんで私いらいらしてるのかが！！」

突然みずきは叫ぶ！

「最近、良いママばっかやってたからだ！

私の本質は悪！そう真つ黒の悪なのを忘れていたわ！
最近悪いことやってなかったからいらいらしてたのよね！

悪の欲求がたまりにたまっているから、なんかとてつもないことし
たいわねえ、、
ぐえっへへへへ！」

不気味な笑いを浮かべるみずき。

「何をするんですか？みずき様」

ぼっこり顔を腫らした野口がみずきに聞く。

「それは、、まだ考えてない！

どんな悪いことしたらいいか募集します！
考えてきて！」

みずきはそう言い残しパチンコへと出かけて行ってしまった。

しかし、ドアを出て行くところとするみずきの前に立ちふさがる影が――
つ。

「こらー！―また悪い事たくらんでるでしょ！」

長い髪に長い手足。

長いまつ毛の奥にある眼に宿る燃える炎。

「正義の味方、朋美参上！」

悪い子は十字架でお仕置きです！

みずきさんには、うめちゃんのために

これからもずっといいママでいてもらいます！」

「えーママってなに？うめちゃんてだれえ？
わかんない！」

私は18才独身なのよ！

そんな子供やあほな旦那なんていませーん！」

みずきはとぼけてまた出て行こうとするが
朋美はみずきの腕をむんずとつかむ。

「どこからどう見ても18才には見えませんよ、、
悲しいことに、、

もう、、あなたはいつでもそうなんですか？

本当は愛情あふれたやさしい人なのに

何でいつも悪の道に行こうとするんですか!」

やさしく諭す朋美だが、みずきはまったく聞いていない様子。

「うるさいわねえ!そんな外人くさい顔で言われても説得力無いのよ!

でも、、、、そういえば、、、、

あんだ、なんか日本人じゃないみたいな顔してるわねえ、、、、
手足も長いし、、、、」

野口もうなずく。

「そつえばそうだな。ほんとに日本人なのか?

まさか密入国なんかしてないだろうな！」

「勇者様までそんなこと言わないでください！
私は生粋の日本人です！」

豆腐と納豆を愛する純和風の女の子なんですから！」

そう力説する朋美だが、みずきと野口は不審顔。
その顔を見ているうちに朋美もなんだか不安になって来た。

本当は私、貰い子で、本当の両親は遠くイタリアの地で
暮らしているんじゃないだろうか、

なんだかそう思えてくる朋美。

「、、、、、、、、ちよっとお母さんに確かめてみます、、、、」

携帯を取り出し実家に電話する朋美。

「あ、もしもし母さん？私だけど、、
私って母さんの本当の子だよねえ？

え？

橋の下で、、ひろった？

だましてごめんなさい、、って、どういふこと、、」

みるみる顔が青ざめる朋美。

携帯を持ったままその場に座り込んでしまった。

「なんかさすがに悪いことした気がしてきた、、

朋美！落ち込むな！たとえ君が橋の下で拾われた子でも君は君のままなんだから！」

慰める野口だが、朋美は暗い顔。

「私、、一人ぼっちなんだ、、わーん！
本当のママはどこにいるの？」

なんだか、いい子になるの馬鹿らしくなってきた、、
だって、一人ぼっちだから、誰も心配してくれないんだもん、、

わーん！

こうなったら！！」

「こうなったら、、なにすんの？」

2人が聞くと朋美は泣き叫んでこう言った。

「グレてやる！！悪いこといーっぱいしてやるうー！！
みずきさん！悪いこと教えてくださいー！！」

詰め寄る朋美にさすがのみずきも当惑顔。

「あ、あんたには無理なんじゃない？
キャラにあってないし、」

「そ、そんなことないですよ！
外に出ていっぱい悪いことしてきましょう！！」

「さあ！出発」

朋美はみずきを引きずって外へ出て行ってしまった。

一人取り残される野口。

ふと見ると、足元に転がる十字架がきらりと光っている。

拾い上げ、まじまじと見る野口。

あれほど大切にしていた十字架を朋美は落して行ってしまったのだ。

それを大事そうにポケットに入れる野口。

そして2人の後を追いかけるため、ドアを勢いよく出て行った。

3 - 1 復活！（後書き）

この後どうしよう、こまった

3 - 2 無理に悪に染まる

「ほら！みてくださいよ！みずきさん。私今、車道を歩いてますよ
お！

思いつきり道路交通法違反だあ！悪って感じい！！」

うれしそうに車道を歩いている朋美を見て
みずきはうつとおしそうに言う。

「そお、、、良かったね」

「よし！今度は壁に落書きだあ！！ああ、、、これで私も悪の仲間
入りね、、、
もう後戻りはできないわ」

「壁にシャーペンで落書きしても、誰も気がつかないわよ！！
もう！やることがせこいのよ！」

朋美はその言葉を聞くとショックを受けて
道端に座り込んだ。

悪の道にも染まれず、世の中で独りぼっちになった自分。

今まで育ててくれた両親が偽物なら
今存在している自分は何者なんだろう。

朋美は自分の存在が宙に浮いたようで
なんだか怖かった。

自分の長い髪の毛も、なんだか今は邪魔なだけの存在に思える。

両の眼にジワリと浮かんでくる涙。

「一人ぼっちがこんなにつらいなんて思わなかった、、」

そんな朋美の様子を見たまずきは、
やさしく朋美に声をかけ、、

るわけもなく、

爆笑していた。
そう、爆笑していた！

ぎゃはははははは！
道端に響き渡るみずきの笑い声。

「あ、あんたおもしろすぎ！

あ、はははっは！

1人が何なのよ！大したことないじゃない！！

あっははっはは！」

なおも響くみずきの笑い声。

その様子を見て朋美はさらに落ち込んでしまった。

あっははは、は、は、は

笑うのをやめたみずきはジロリと朋美を睨む。

たじろぐ朋美に向ってみずきはなおも言葉を放った。

「あんた、こんなに仲間がいるのに、何がひとりなのよ！

おかしくてたまらないわ！！」

ニヤッと笑うみずき。

その様子を見て朋美も少し笑顔を浮かべた。

「ありがとう、」

立ち上がった朋美は涙を拭いて、また歩き出した。
しっかりとした足取りで、みずきと一緒に歩いて行く朋美だった。

3 - 2 無理に悪に染まる（後書き）

おひさ！

3 - 3 やっぱり一人ぼっち？

「いいえ！あなたはひとりなのよ！！
一人ぼっちのぼーりぼりなのよ！」

朋美がその声にふり返る。

「おかあさん！」

そこには、40代ぐらいの女性が立っていた。
それにしても、朋美にそっくりである。

「ふふふ、、、22年前の嵐の日
帰り道を急ぐ一人の美女がいた、、私だけだね！」

ふと見ると橋の下にかわいい赤ちゃんが捨ててあるではないか！！
慌てて駆け寄った私はその子を抱き上げた。

すると、、、、

「え？それって私？」

朋美は複雑な表情で尋ねる。

「うるさいわね、、黙って聞きなさい！

すると、一匹の野犬がよって来て
なんと私に話しかけるではないか！！」

朋美はうなずく。

「犬は喋るわよね、、CMとかでよく見るし、、」

「犬が言うには

その子は私の子供なんですけど

貧乏で育てられなくなってしまいました！！

良かったらあなたが育ててくれませんか？

親切で美人な私はうなずいた、、

その時の子があなたなのよ！！

つまり

あなたの本当のお母さんは犬なのよ！！」

朋美はショックで座り込む。

「ああ！！やっぱり！

骨付きカルビとか大好物だし

そうじゃないかとおもってたのよおお！

私の本当のお母さんはどこの？

ああ！！」

座り込んで泣き出す朋美を見て
にやりと笑うお母さん。

あきれながら状況を見ていた
みずきはため息をついて朋美のお母さんに言った。

「で？本当はどうなの？」

お母さんは笑いながら言う。

「この子、ちょっとおバカさんだから
いつもこうやってだましてんのよ！」

この前は本当の親は馬ってことになってたんだけど、

なんで毎回だませるのかしら、この子。

親の私が不思議になってきたわ」

なおも泣き続ける朋美。

すると後ろの方から声がする。

「おい！やっと見つけたあ！！」

朋美！落し物だぞお！！」

野口だ。

走り寄る野口の右手には十字架がしっかりと握られている。

「勇者様！！」

朋美が叫ぶ！

とたんに笑顔になる朋美。

その朋美の姿を

なぜかお母さんは苦々しげな表情を浮かべている。

「アレが勇者か、、、
なるほど、、、」

お母さんはなおも野口を見つめている。

その燃えるような眼を

野口はまだ気づいてもいなかった。

3・3 やっぱり一人ぼっち？（後書き）

ホームはここ

3 - 4 種族が違うの!!

「勇者様！十字架ありがとうございます。
拾ってくれたんですね、、うれしい。」

私のことを気にかけてくれたんですから、、
こんなにうれしいことはないわ」

朋美はじつと野口を見つめる。

そのうるんだ瞳を見ると

朋美が野口をどう思っているかが

手に取るようにわかる。

「好きです!!」

朋美は別に口に出さなくても
分かっているのに

改めて野口に言う。

少し照れて頭をかく野口。

しかし順調な恋には必ず
邪魔が入ると昔から決まっている。

「ちょっと待ちなさい朋美」

冷淡な視線で朋美を見るお母さんは
おもむろにバッグの中から
何かを取り出す。

「朋美、、あなたは犬なんだから
これをつけときなさい。」

後、大事なことを
今あなたに伝えておくわ」

お母さんの手に握られているのは
犬の耳がついた力チューシャ。

「あなたは犬なんだから！！」

そのアホ面の彼氏とは
種族が違うの！！

だからけっこうなできないしい！！

あなたとそのアホ面とは
一生ペット以上の関係にはなれないのよおおおおー！！」

朋美は顔面蒼白。

まるで体に電流が走ったよう。

細かく身体が震えるのを
必死で止めようとする朋美。

そんな朋美に容赦なく
犬の耳を頭につけるお母さん。

「あと、言い忘れてたけど
あなた犬なんだから言葉の語尾に

ワンってつけるの忘れないでね！

ふえっへへへへ」

自分の頭の上に付いた犬の耳を触る朋美。

自分のどうしようもない運命、
いや宿命を心から呪う朋美。

どうあがいても
愛する人とは結ばれない。

だって、種族が違うから、、、

「そうだワン、、、
勇者様と私は結ばれない運命だワン、、、」

落涙。

朋美の眼から涙がこぼれ落ちる。

過酷な運命に翻弄される朋美の心は
まるで荒波にもまれる一艘の小舟のように

激しく揺り動いていた。

3 - 4 種族が違ふの!! (後書き)

ふうふう

3 - 5 野口は駄目！

道行く人々も朋美を見て不思議そうな顔をしている。

いい歳して犬の耳をつけた
若い美女が

顔面蒼白になって
道端で泣いていたら

目を引かないはずがない。

野口はその姿を見て
やさしく朋美を慰める。

「まったく、こんなところで泣いちゃって
子供みたいなんだから」

朋美は野口の顔を覗き込む。
やさしい野口のまなざしに少しほっとする朋美。

「でも、、、勇者様と私は結ばれない運命だワン、、、でも、、、でも、、、」

ペットでもいいから勇者様のそばに
一生居たいワン!!

女の子じゃなくてメス犬だけど
そばに置いてほしいワン!!」

必死に朋美が頼む姿に心を動かされ
野口もうなずく。

「わかった、、、いいよ。

だから泣かないで」

「ワン勇者様じゃなかったご主人さまあ!!」

「朋美じゃなかったメス犬!!」

「ご主人さま!!」

「このメス犬があ!!」

道端で抱き合つご主人さまとメス犬。

種族が違つても
その愛は変わらないようだ。

だが、その姿を苦々しげに見つめる
お母さん。

一体何が気に入らないんだろう。
いらいらとした眼差しを2人に向ける。

「だめ、だめそいつは駄目よ！
絶対に！」

そう言うとお母さんは
また鞆から何かを取り出し
朋美にこう言う。

「ほれワンちゃん！」

とつてこーい！」

お母さんはボールを遠くに
ぶん投げる。

野口と幸せそうに抱き合っていた朋美だが
そこは悲しいメス犬の本能。

「あ！ボールだワン！」

とってくるワン！」

野口の傍らから離れ
ボールを追いかける朋美。

その様子を不思議そうに見ていたみずきは
頭をひねりながらお母さんに尋ねた。

「あんだ、見てたら
どうやら野口と朋美が
付き合うのに反対して、
引き離そうとしてるように

見えるけど、」

お母さんはなおも憎悪の眼差しを野口に向け
こつつぶやいた。

「そう、あいつだけは駄目！
絶対だめなのよ！！」

あいつを朋美から引き離さなきゃ、
「

3 - 6 父登場

お母さんは

青白い顔をして

改めて野口を憎悪のこもった眼で見つめる。

「あいつだけは駄目、、、

朋美には、私と同じ思いをしてほしくない、、、
あいつは、同じ匂いがするのよ

世の中でもっとも

私が憎んでるあいつと」

頭を抱えて座り込むお母さん。
すると突然後ろから聞こえてくる。

「その憎んでいるあいつとは私のことかね？」

その、甘く低い声にお母さんはびくつとしてふり返る。

一部的隙もなくアルマーニのスーツを着こなし
きれいに刈りそろえられた髭をなでながら

その紳士は尚も言葉を続ける。

「朋美。騙されてはいけないよ。
君はまぎれもなく私の子供だ。

愛してるよ、朋美」

朋美はその言葉を聞くと
喜んで立ち上がり、犬の耳を投げ捨て
叫んだ。

「お父さん!!」

お父さんに走り寄る朋美。

お父さんは胸ポケットからハンカチを出し
朋美の涙を拭いてあげている。

「ははは、朋美。

こんなに泣いちゃ美人が台無しじゃないか」

「おとうさん！」

また泣き出した朋美。

その傍らにいた野口にお父さんは右手を差し出す。

「君が野口君かい？朋美から話は聞いているよ。
私が朋美の父だ。よろしく」

握手をする野口とお父さん。

「いつも朋美が世話になっているみたいだな。
礼を言うよ。」

そう言えば、君は小説を書くのが趣味らしいじゃないか
良かったら私の本も読んでみるかい」

お父さんは野口に本を渡した。

渡された本の題名を見て
とたんに震えだす野口。

膝をガクガクさせて
脂汗を出しながら野口はお父さんに尋ねる。

「え？え？この本、、あなたが書いたんですか？

え？マジで！」

「ああ、そうだよ。

私の職業は小説家だからね」

「うつそー！サインください！

俺この小説の大ファンなんですよー！

すげー！

俺この本毎日読んでるよー！」

興奮した野口はお父さんに駆けより
サインを本にしてもらっている。

その様子を見ていたみずきはお母さんに尋ねた。

「ふーん、あんたの旦那偉い人なんだねえ？
それなのになんでそんなに嫌ってるの？

わかった！浮気しまくってるのか？」

「いえ、、あの人は浮気はしないわ、、」

そう言ってお母さんは

先ほど野口がもらった本をみずきに差し出す。

その本を手にとったみずきは
表紙をなんとなく眺めた。

、、

表紙を眺めてなぜか違和感を感じるみずき。

その表紙にはこう書かれてあった、、

「乳首にアツアツごはんのせて食べてみました！」

作 ぽこちんライス君

3 - 7 みずき、あっさり裏切る

「ライス先生！次回作はまだなんですかあ！！
俺待ちきれないっすよ！！」

「ははは、よく言われるよ。」

次回作は、本格的に賞を狙っていいことと思ってね。

気合い入れて書くよ。ははは！」

ライス先生と野口は楽しそうに話しているが
みずきは本を眺めたままフリーズしている。

そして、恐る恐る本を開いて読んでみる、、

「乳首にアツアツごはんのせて食べてみました！」

あつ！あつ！あつー！！！！

やっぱ無理！！無理！むりのすけー！！

たとえコシヒカリでもむりー！！

やけど！やけどしたっちゅうねん！

乳首黒くなってもうたやん！！

もともとやけどね！！

むっはー！！！！

ゝゝゝゝ

みずきは静かに本をゴミ箱へ投げ捨て

ため息をついた。

「おかあさん、ゝゝ、気持ちはいくわかった。

確かに芸風が野口にそっくりだわ、
あんたの旦那。」

お母さんはその場に泣き崩れた。

「だから、あいつとだけは付き合ってほしくないの！！
変態旦那を持って苦労してほしくないの！あの子には！！

所で

みずきさん！お願いがあります！」

みずきに懇願するお母さん。
当惑顔のみずき。

「あの野口を朋美から引き離してください！
お願いします！」

「でも、、２人は愛し合ってるわけだし
なりゆきに任せる方が、、」

お母さんはおもむろに
バックから札束を出してみずきの前でちらつかせた。

「あいにくうちは夫がベストセラー作家なもので、
お金はありますのよ。」

とたんに燃え上がるみずきの眼の奥の炎。

「まっかせてくださいーい！

あの腐れ野口とお宅のお嬢様が付き合うなんて

身分が違いすぎますよねえ！！

前からそう思ってたんですよ!!
ほんと!

きっちり別れさせて見せましょう!!
ついでに野口は再起不能にします!!」

くくく、く、

悪魔的な笑いを浮かべるみずき。

あのみずきに目をつけられてしまった2人。

2人にとっての最大のピンチであることは
間違いなかった。

3 - 8 決戦

「君の小説、読ませてもらったよ。
なかなか筋がいいじゃないか、気に入ったよ」

そう言いながらお父さんはコーヒーのカップに手をかけた。

オフィス街にあるオープンカフェ。

心地よい風が吹き抜ける天気の良い日に

野口はお父さんとコーヒーを飲みながら
小説談義をしている。

「マジッすか？あざーっす！

いやあ自信作をほめられるとうれしいなあ」

「でもこの、必殺ぐるぐるパンチを受けた
主人公がむっはーと言ったところを

むっひーにした方が

主人公の心象風景がよく表れて

読者にも伝わるんじゃないかな？」

「なるほど！さすがプロ！
参考になりまっす！」

2人が夢中で話していると
突然強い風がオープンカフェに吹きすさぶ。

吹き飛ぶコップやナプキン。

2人は風をやり過ごした後
顔をあげると

そこには一人の女性が立っていた。

その女性は周りが凍りつきそうな笑みを
浮かべ野口に近寄ってくる。

「悪魔登場よ！野口こんなところで何してんの？」

みずきだ。

みずきは野口の膝に座り
うるんだ瞳で野口に尋ねる。

「私、、さびしかった、、
最近全然かまってくれないから。」

あなたが十字架の女の子に浮気するからよ、、
あなたは私のことが嫌いなのか？」

「いいええ！そ、そんなことはないんですけど
みずきさんは、、旦那さんがいるし、、」

そう言う野口をみずきはいきなり平手打ちをして
胸ぐらをつかむ。

「旦那は関係ないのよ！」

私のことが好きかどうか聞いているだけなのよ！

さあ！答えなさい！好き？嫌い？どっちなのよ！

みずきに詰め寄られただらだら汗を流しながら
困っている野口。

するとまた聞きなれた声が
昼下がりのオープンカフェに響き渡る。

「悪魔よ勇者を解き放ちなさい！」

みずきさん！今度という今度は許しません！」

首にかけられた十字架を右手に握りしめ
顔を真っ赤にして、みずきを睨みつける。

そこには烈火の如く怒った朋美が立っていた。

「みずきさん！いたいいくらでお母さんに
買収されたんですか！」

いくら金に目がくらんだからと言って
勇者様を誘惑するなんて！！

梅木さんやうめちゃんがそんな姿を見たら
どう思つか考えたことありますか！！」

「ママー！がんばれー！」

「みずきよお！てめえのすべてを出し切って
頑張れよお！ひっひひひ」

声のする方に思わず振り向く朋美。
そこには梅木とうめちゃんが立っている。

「朋美さんよお！俺たちは愛より金の方が大事なんだよお！
だからさくつとそこの馬鹿と別れてくんないかあ？

悪いようにはしねえからよお！ひっひひひ」

「みずきよ、ゝゝ、悪いが野口と別れてくれ！
わしはウィーをネットにつなぎたいのだ！」

その言葉を聞きがくつとうなだれる朋美。

「ええ！うめちゃんまで！」

この腐れ家族が、、

わかりました

まとめて退治してくれます！

かかってきなさい、悪魔ども！」

天使と悪魔一家が対決しようとしている中
すくつと立ち上がったお父さんが中に割って入る。

「待ちたまえ。ここは一旦私に勝負を
預けてくれないか。

ここの店にも迷惑がかかるからな。

朋美、いいな」

お父さんにそう言われると朋美は
力が抜けたようにイスに座り込んだ。

しかし、悪魔は黙ってはいない。

「うるさいわね！こっちは一家の生死がかかってるのよ！
いますぐ朋美を始末して金が欲しいのよ！！」

お父さんはその言葉にうなずくところ言った。

「しかし、このまま天使と悪魔が戦うと
死人まで出かねん。

しかるべき場所で正々堂々と
勝負をつけると言っるのはどうだろうか？

勝負方法は私が考えよう、

決着をつける日は明日！

場所は東京ドームと言っことでどうだね？」

みずきはその言葉を聞くとにやりと笑う。

「ははは、いいわよ。」

明日待つてるわよ！朋美。
八つ裂きにしてくれるわ！」

わっはははは

高笑いを浮かべながら
悪魔たちは帰っていく。

その姿を眺めながら野口はぽつと
つぶやいた。

「観客の前で決戦か、、

なんか、連載に行き詰ったマンガって
よく戦いでごまかしてたけどこれって、、
「

3 - 9 今日はお休み

目覚ましの助けを借りずに目を覚ます。
これが休みの日の楽しみの一つだ。

今日、野口は休み。

すっかり強くなった日差しに、せかされるように
野口はベッドから出た。

昨日からつけっぱなしのテレビ。

朝のくだらない番組が流れる中
目をこすりながら野口は冷蔵庫から

アイスコーヒーを取り出す。

「あ、テレビ消そ、
朋美に見つかったら怒られるよ。

あいつエコエコってうるさいからなあ」

野口は電気の無駄使いをして怒る

朋美の顔を思い浮かべながらテレビを消す。

飲み干したアイスコーヒーの感触が
まだのどに残っている。

なんでもない休みの朝。

そんな朝でも、起きて一番に
朋美の顔を思い出した野口は

朋美の存在が自分の中で
大きくなっていることに気が付きはじめていた。

ピンポン

玄関からチャイムの音が聞こえる。

現れたのはやっぱり朋美だ。

休みの朝、ここに朋美があらわれ
決まってどこかへ連れて行けとせがむ。

野口にとっていつもの変わらぬ情景。

今の野口にとってこの情景が
無くなることは考えられない。

部屋に朋美があらわれるのは
それほど野口にとって日常になっているのだ。

これが人を愛するということなんだろうか。

朝のぼんやりした頭でそう野口は考える。

だが、そんなことを考えているとは
おくびにも出さない野口。

「ああ、なんだよ？
俺は眠いんだけど？」

照れ隠しなんだろうか
付きはなすような態度の野口。

「のーぐーちーさん
あーそーびーまーしょー！

ほら！外はこんないい天気ですよ。
こんな日は外に出なきゃ損ですよ。

その市民プールでも行きませんか？
今年初泳ぎしましょうよお」

「市民プール？そののか？

あんなガキンちよしかいてないプールに行くのか？
なんか気が進まんあゝゝゝ」

「いいじゃないですか。
行きましょうよ！楽しいですよ、きっと

それに入場料激安！200円ですよ！
食べるものにも困っている野口さんには
ぴったりのバカンスじゃないですかあ？」

それを聞いて睨みつけ怒ってる野口。

そんな視線を全く無視して
腕を引っ張りお願いをしている朋美。

そんな朋美を見て野口は思う。

やっぱり毎週お決まりの

これがなくなるなんてことは考えられない。

なくなったらちょっとさびしい、、

しぶしぶ野口は出かける準備を始める。

顔を洗い歯を磨く野口を横目に見ながら
朋美は幸せそうな笑顔を浮かべている。

「あれ？所で今日なんか約束なかったっけ？

大事な用が何かあったような、、」

それを聞くと朋美は大きく首を振って

野口を見つめる。

「大事な用事なんてありません。

野口さんと2人で過ごす時間の方が私にはよっぽど大事です。

外野がなんと言おうと私には関係ありません！

私は野口さんが好き。

それだけでいいんじゃないですか？」

歯を磨きながら野口は微笑む。

「、、、、それもそうだな」

「じゃあ、歯を磨いたら出発しましょ！今日は楽しむぞお！」

部屋のカギを締め2人は出かけて行った。

「今日は面白いこと言わないんですね？
野口さん」

「2人の時はなし」

どこから見ても仲の良いカップルは
夏の日差しが照りつける街へ出かけて行った。

4 - 1 宝

なぜか野口はうつろな顔。

隣にいる朋美とも視線を合わせず
テレビばかり見ている。

テレビから流れるのは
くだらないお笑い番組。

その番組を野口は笑いもせずじっと見ている。

「なあ、朋美」

「なあに？」

朋美はポテチを食べながら
答える。

「朋美はギャグをまねするのが大好きだよなあ？」

「うん。ルネッサンスとかいつも言ってるよ」

「そつだよなあ、」

野口はそう言つとテレビに映る映像を指さしてこつ言つ。

「じゃあ、このギャグはマネしないのか？」

なぜなんだ？結構有名だぞ！」

テレビからはおっぱい飲みたーいのか？
という下品なギャグが流れている。

顔を赤らめる朋美。

「野口さん、これはできませんよ
なぜそんなこと言つんですか？」

野口は口元をゆがめにやりと笑って
朋美に向ってこう言い放った。

「ふふふふ、よくぞ聞いてくれました。

実は俺は朋美のおっぱいが飲みたいんだよおお！
さあ！いえ！早くいえ！

そして今すぐ脱げ！ふえっへへへ！
僕赤ちゃんでちゅう！ちゅうちゅうすいたいよおおお」

どこからかガラガラとおしゃぶりを出してきた野口は
よだれをだらだら流しながら朋美へと迫る。

最初は困惑していた朋美だったが
静かにうなずくと胸元のボタンを一つ一つ外していく。

「ぐえっへへへへ！ちゅうちゅうすってやるぜええ！

ふしゅるしゅるるる」

野獣と化した野口が一步また一步と朋美に迫つてく、

じりりりり

目覚ましの乾いたベルの音にガバツと飛び起きる野口。

息は荒く全身汗びっしょりだ。

恥ずかしい夢を見てしまった。

もしこんな夢を見ているなんて朋美に知れてしまったら、

「汗びしょびしょですよ。着替えここに置いときますね」

毛を逆立て、目を飛び出さんばかりに声のする方を見る野口。
そこには、朋美が立っていた。

夏なので当然薄着の朋美に思わず目をそらす野口。

「驚かしてごめんなさい。カギが開いていたんで入ってきてしまいました。」

それにしても不用心ですよ！戸じまりはしっかりとしてくださいね！

それと、ゝゝゝ」

「それと、なんだ？」

野口は不機嫌そうに聞く。

「申し訳ないんですけど、、私赤ちゃんがいないので
おっぱい出ないんです。」

出るようになったら必ず召し上がってもらいますから、、

「ごめんなさい、寝言聞いてしまいました」

それを聞いた野口はまるで犬のうんこを踏んでしまった
小学生のような表情。

眼には涙をいつぱいためている。

「朋美、、聞いていたのかあ、、」

切ない声で朋美に聞く野口。

「私のでよかつたら飲む？

20年前に朋美にあげて以来だから出るかわかんないけど」

またまた毛を逆立て切ない表情で声のする方を見ると
朋美の横にはお母さんの姿がある。

般若のような顔をしたお母さんはなおも言葉を続ける。

「あんたたちが、対決をすっぱかした日の夜から
お父さんの姿が消えてしまったのよねえ！

この紙切れ一枚を残して！

あんたお父さんと変態仲間でしょ？
なんか知らないの？」

当然野口には身に覚えがない。
そして、お父さんの残した紙切れを読んでみる。

「お母さんへ

お父さんは宝の地図を手に入れました！！
やっほー！！

んでもって宝を探す旅に出ますので
あとはよろしく！

じゃあね！」

宝つて、、、
今時、、、

「野口さん！いえ、勇者様！
行方不明のお父さんを探す旅に出てくれませんか？」

野口は懇願する朋美の胸に光る十字架を見つめながら
複雑な気持ちでそこに立ちつくしていた。

おっばいが宝を探せと言っている、
、
、
、
、
、

野口はぽつりとつぶやいた。

4 - 2 いつも考えています！

「ライス先生が宝を探しに行って行方不明かあ、、
朋美は心当たりないんだよなあ？」

「勇者様、、私もわからないんですよ
心配です」

2人は結局お母さんに命じられ
お父さんの行方を追うことになった。

野口の部屋であれこれ悩む2人。

すると、突然ドアをどんどん叩く音がする。
その尋常でないドアの叩きっぷりに驚いてドアまで走る野口。

慌ててドアを開けるとそこにはファロスが立っていた。
顔は顔面蒼白、ノートパソコンを手にしてファロスは震えて立っていた。

「どうしたんだ、ファロス。何か手掛かりでも見つけたのか？」

野口が尋ねるとファロスは震える声で話した。

「あああ、私は恐ろしいものを見てしまいました、、
とにかくこれを見てください！！」

部屋に入って来たファロスは机の上にノートパソコンを広げ
スイッチを入れた。

ファロスは動画を再生する。
画面に見入る三人。

そこには、、、、

布団の中でうなされる男。

男は何やら、うなされているようだ。
繰り返し寝言を言っている。

「く、く、っばい、おっぱいはーい！

朋美のおっぱいちゅうちゅう、おいしいなあー！」

く、く、く、

「く、く、って、俺じゃねえかあ！！
どこでこの映像を入手したあ！」

野口はまるで先生におかあさんと言ってしまった小学生のような切ない表情で叫ぶ。

「とあるご婦人にこの男を社会的に抹殺してほしいと依頼があつたもんで、you tubeに投稿してみました！

もう10000アクセスありますよ！すごいですねえ！

私の用事はこれだけです！じゃあ」

風のように走り去るファロス。

「な、何しにきたんだ？あいつ、」

野口は疲れた声で言う。

そして朋美はなぜか野口を疑わしそうな眼で見ている。

野口に何かを言いたそうだ。

「なんだよ朋美、その眼は！」

朋美はなおも野口を見つめてこう言う。

「もしかして、、野口さんいつもこんなこと考えてるんですか？
こんなエッチなこと、、」

朋美に言われた野口は真っ白になって燃え尽き床に倒れこむ。

そして

絞り出すような声で野口はこう言った。

「、、、、はい、いつも考えてます、、、、すいません」

すべてを白状した野口の魂が今
入道雲浮かぶこの夏空に昇天していった。

男なんてこんなもんだ！

4 - 3 深キヨンスイッチ

「いらっしやいませ！何名様でしょうか？」

野口と朋美はファミレスにやって来た。

「2人です、、」

野口がそう言つと店員はにっこりとうなずく。

「大人1名とおっぱい星人1名様3番テーブルにご案内します！」

ふふふ、、見ましたよ」

店員はいやらしい目で野口を見る。

「ううう、、おっぱいってなんだよう！
わーん！-！」

野口は朋美の手を引いて

逃げるように店を出ていく。

なんと言う浸透力。

恐るべきユーチューブ。

今や野口は街中では知らない人がいないほどの
おっぱい星人になってしまったようだ。

すれ違う人も野口を見てくすくす笑っている。

「わー！おっぱい星人がきたー！にげろー！」
子供達も野口を見るとそう言って走って逃げていく。

野口は道端で頭を抱えて座り込んでしまった。

「うつゝゝゝ、もう俺の人生終わりだあ！
こうやって俺は一生世間から変態扱いされるに違いない！

うえーん！

ライス先生！俺はどうしたらいいんですか？

こんな時に先生がいてくれたら勇気づけてくれるのに！

ライス先生！いったいどこに

行ってしまったんですかあ！！」

悲嘆にくれる野口。

「そうですね、何か手掛かりでもあったらいいんですけど、」

朋美も不安そうな表情。

そんな2人のもとへ

またもや、ファロスが息を切らせながら走り寄ってくる。

「おっばいさーん！

これを見てくださーい！

お父さんの手がかりを発見しましたよー！」

ファロスの手にはまたもや

ノートパソコンがある。

嫌な予感がする野口。

「おっばいさんはやめてくれ、、、

所でどんな手掛かりなんだ？」

「お父さんのブログを発見したんですよ！

見てください！」

ファロスパソコンを立ち上げる。

すると画面にお父さんのブログが映し出された。

<お父さんスイッチよりも深キョンスイッチを作ってくれと教育テレビにお願いするブログ>

いつやあ、教育テレビでね！

押せばお父さんが何でも言うことを

聞くってスイッチがでてくるんだけどね

そのの深キョンバージョンを作ってほしいわけ？ライスとしては。

<甘えるボタン>とか

<やさしく怒ってくれるボタン>とか

押したいのよ。ライスはね。

だからあ教育テレビに何回も投書したんだけど
なーんの返事もないわけよ。

決定。

爆破。

教育テレビ。

庶民のささやかな意見を踏みにじる？
怖いねえ、、、巨大組織は。

ぼーんと言っちゃう前にい
今からテレビ局に突入してきまーす！！

あ、そうそう

<やさしく添い寝してくれるボタン>も作ってもらおうと！
じゃあねえ

、
、
、

「私が見せたかったのはこれだけです！じゃあ！」

ファロスはまた風のように
走り去ってしまった。

また
取り残された2人。

「な、何なんだ？今は、、
なんの手がかりにもなってないじゃないか、、」

「いえ、、勇者様。お父さんは
テレビ局に抗議をしに行っただってことはわかりましたよ。

抗議の内容はさっぱりわかりませんが、、

とにかく行ってみましょう！教育テレビに」

「そうだな、、とにかく手がかりは
それしかないようだし」

とにかく手がかりを得た2人は
テレビ局へと向かう。

そこにお父さんはいるのだろうか？

とにかく、深キョンスイッチを
ぜひ作ってほしいということだけは間違いないようだった。

おわり

夏の街に繰り出した2人。

仲良く歩く2人の後ろに
やっぱり忍び寄る影。

「こらあああああああ！！」

なにバツくれてんだよ！！」

つめちゃめちゃゝゝ、そう

めちゃめちゃに怒っているみずきが
姿を現したのだ。

こら！野口！

ドームでさんざん

待たされた時間を返せ！！

今日こそは決着をつけさせてもらっわよ！」

みずきは大きく息を吸い込んでの野口に尋ねる。

「さあ天使が好きなの？
それとも

悪魔が好き！

なの？

はっきりにしないで」

野口はその言葉にちよつと笑つて
朋美をちらりと見る。

朋美は顔を赤くして
言葉を待っている。

「さあ！！答えなさい？

どっちなの」

答えをせかすみずき。

野口は観念したかのように目をつぶり
息を吸い込み大きな声で答えた。

「やっぱり、、やっぱり

悪魔が好き！！！！」

その言葉を聞いた瞬間
愕然とする朋美。

「なぜ？なぜなんです？

なぜ悪魔なんか私より好きなんですかああ」

泣きそうな朋美を見て
ちよっぴりいたずらっぽい笑いを浮かべた

野口はこう言った。

「厚かましいやつだなあ、、

自分を天使だと思っていたのか？
最初から言ってるだろ。

朋美は正真正銘

<十字架を首に下げた悪魔>

なんだよ！

そして俺はその悪魔が好きなんだ！」

顔を赤くする朋美。

「私が悪魔と言っのはちょっと引っかけますが、、、

とにかく野口さんが初めて私に好きだって言ってくれた。
うれしーい！ー！」

野口に抱きつく朋美。

その様子をあきれ顔で見ている見ているみずき。

「なんかばからしくなってきた、、、」

バイトでも探しにいこ、、」

立ち去ろうとするみずき。

その後ろ姿にむかつて朋美が叫ぶ！

「ありがとう！みずきさん！」

みずきはふり返らず
ちよつと手をあげ

そこから去って行つた。

何かと波乱はあつたが
落ち着くところには落ち着いた2人。

これからも波乱はあるだろうが

仲間^がに助けられながらも
乗り越えていくんだろう。

そして最後に一言。

がんばれ野口^が！

<おわり>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8348d/>

彼女は悪魔！

2010年10月21日23時26分発行